

324-56



七
五
〇

法

不折山人著及画
碧梧桐題句及書



42 6 17
藏書



俳畫法

目次

一 扉	芭蕉畫	木版
一 口繪	雪舟畫	寫真版
一 全	立圖畫	同
一 全	古湖畫	同
一 俳畫	不折畫碧梧桐題句及書	十二月
	木版彩色刷	四季四十句
一 俳句	碧梧桐句及書木版刷	

中村 不折 著 及 畫
河東碧梧桐題句及書



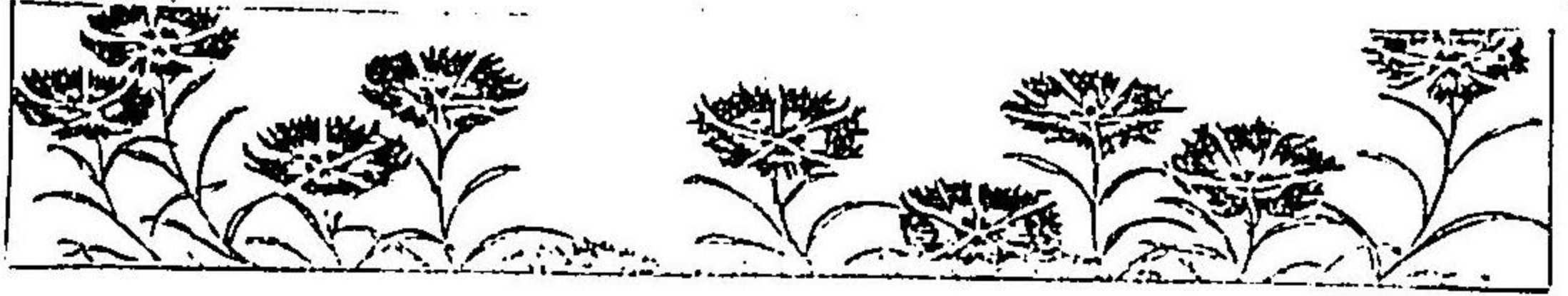


一 俳畫論

第一章	題畫の心得	一
第一	緒言	一
第二	翻譯的	二
第三	謎的、理屈的	三
第四	連想	五
第五	變化	七
第六	對照	八
第七	反對	八
第二章	畫風	九
第一	原流	九
第二	森川許六	一〇



第三	松花堂	一一
第四	本阿彌光悅	一二
第五	英一蝶	一二
第六	立圃	一四
第七	古湖	一五
第八	蕪村	一五
第九	素榮	一六
第十	光琳附乾山	一七
第十一	仙厓	一七
第十二	華山の俳論	一八
第十三	近世	二一
第三章	畫法	二一
第四章	題畫の實價	二七



俳
畫
法
目次終

第五章	運筆法	四
第六章	結論	三六



俳
畫
法
目次終

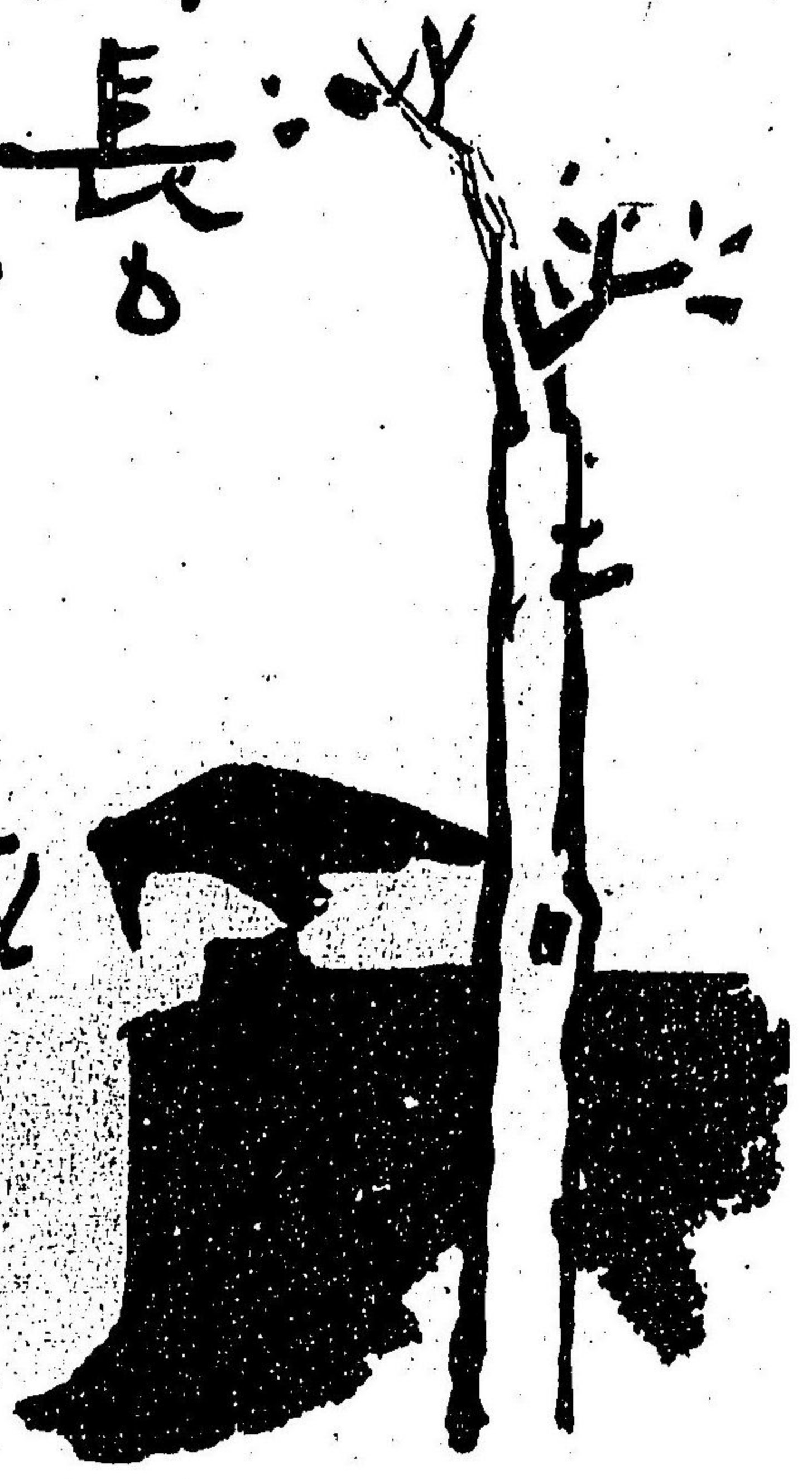
第六章	結論	三六
第五章	運筆法	三二
		四



和州
西巖寺古園亭

川長

惠方
舟義
碧



印

因

牛の大原

後あたらし

くさ春碧



廓

不

灸師

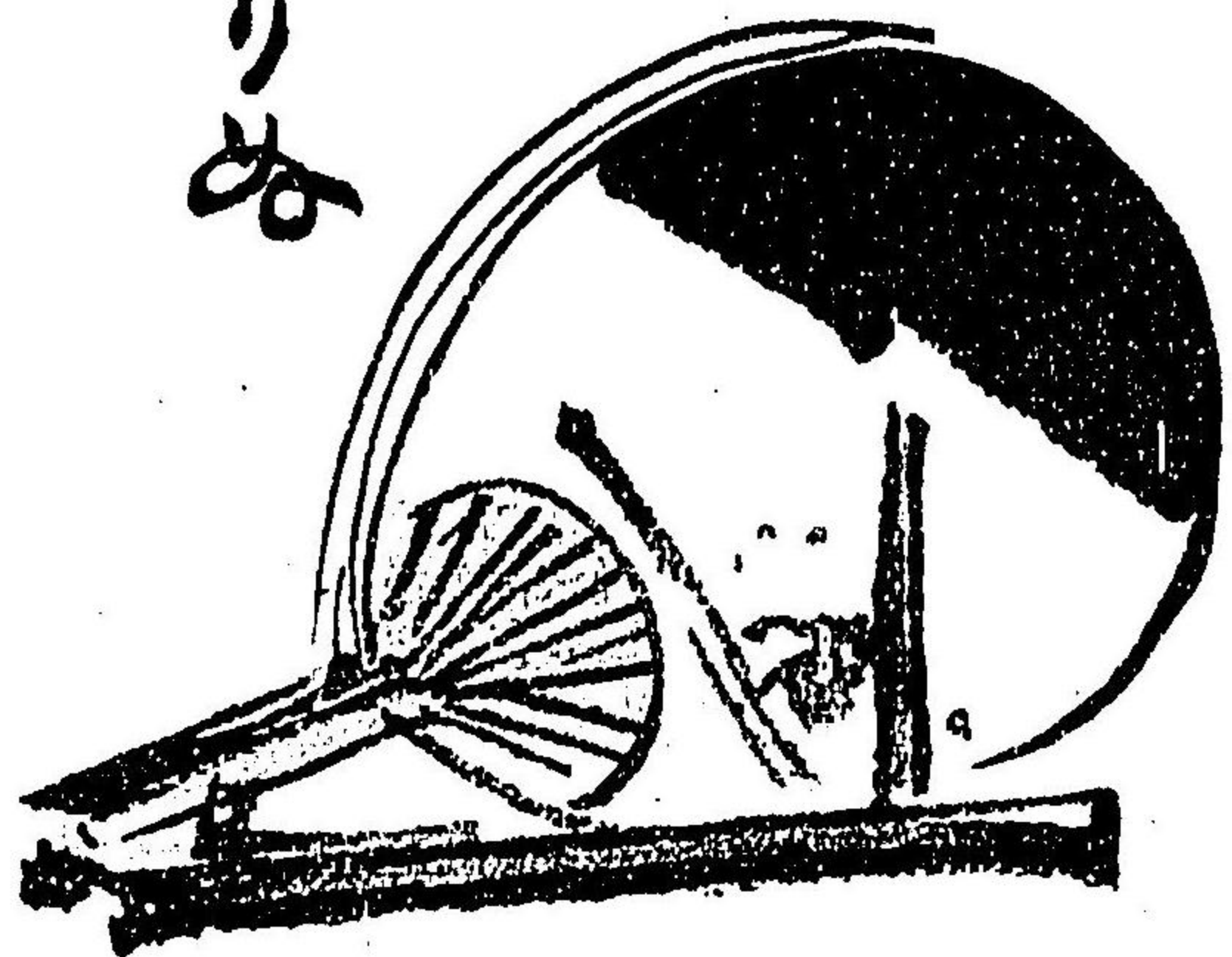
佳みけ川

水温む



因

其を待て
遺つて
側よ
墨塗りぬ



五

城南の
離宮
藪の
清水
環



五



竹婦人碧
 十八樓
 周度比
 言

四



弟妹
 里人
 夜長
 比

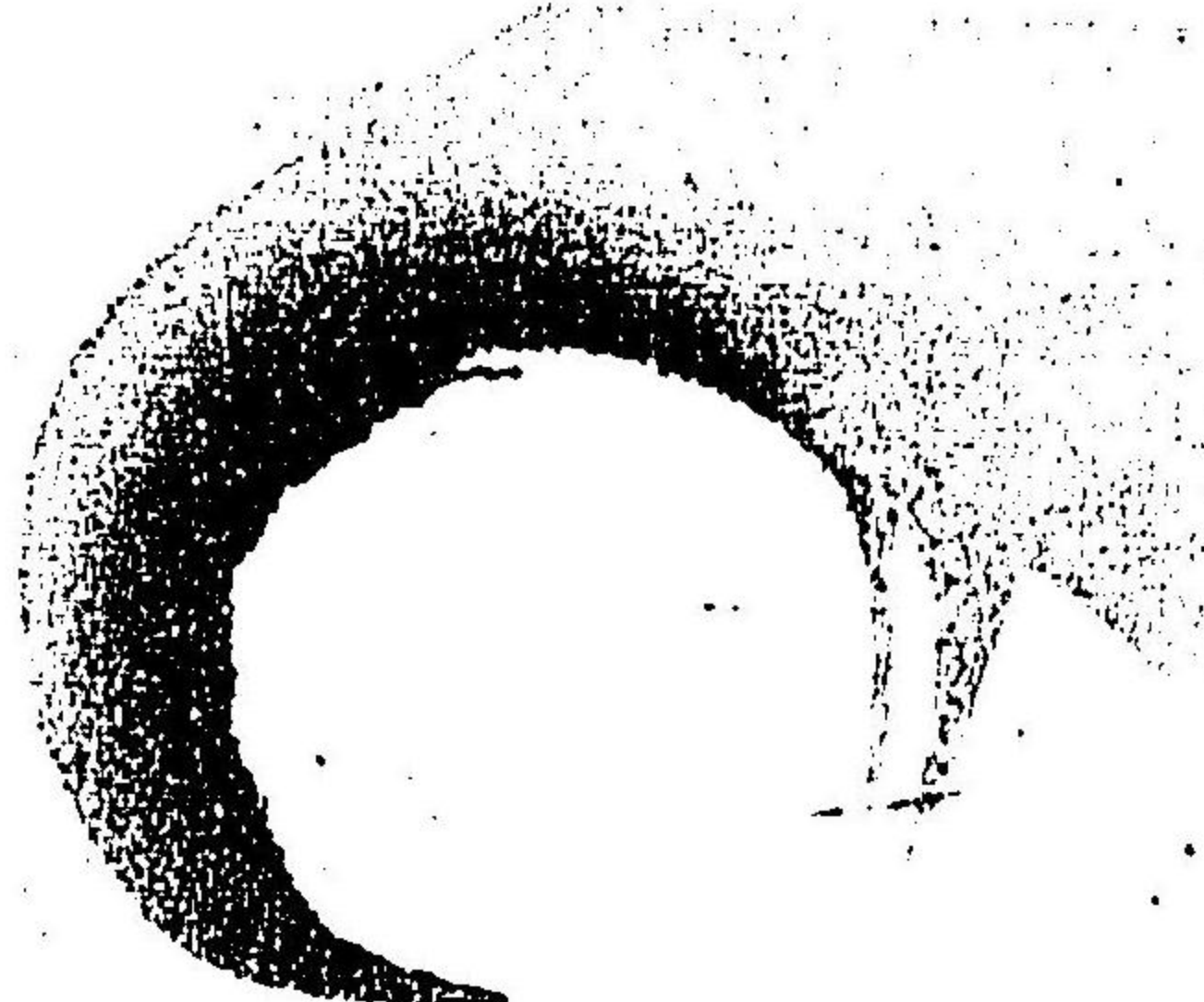
五

四



飛ぶ蜻蛉
子三人も
漁翁也
塙

四



馬の便り待つ
ことへあそ
陣の秋
塙

四

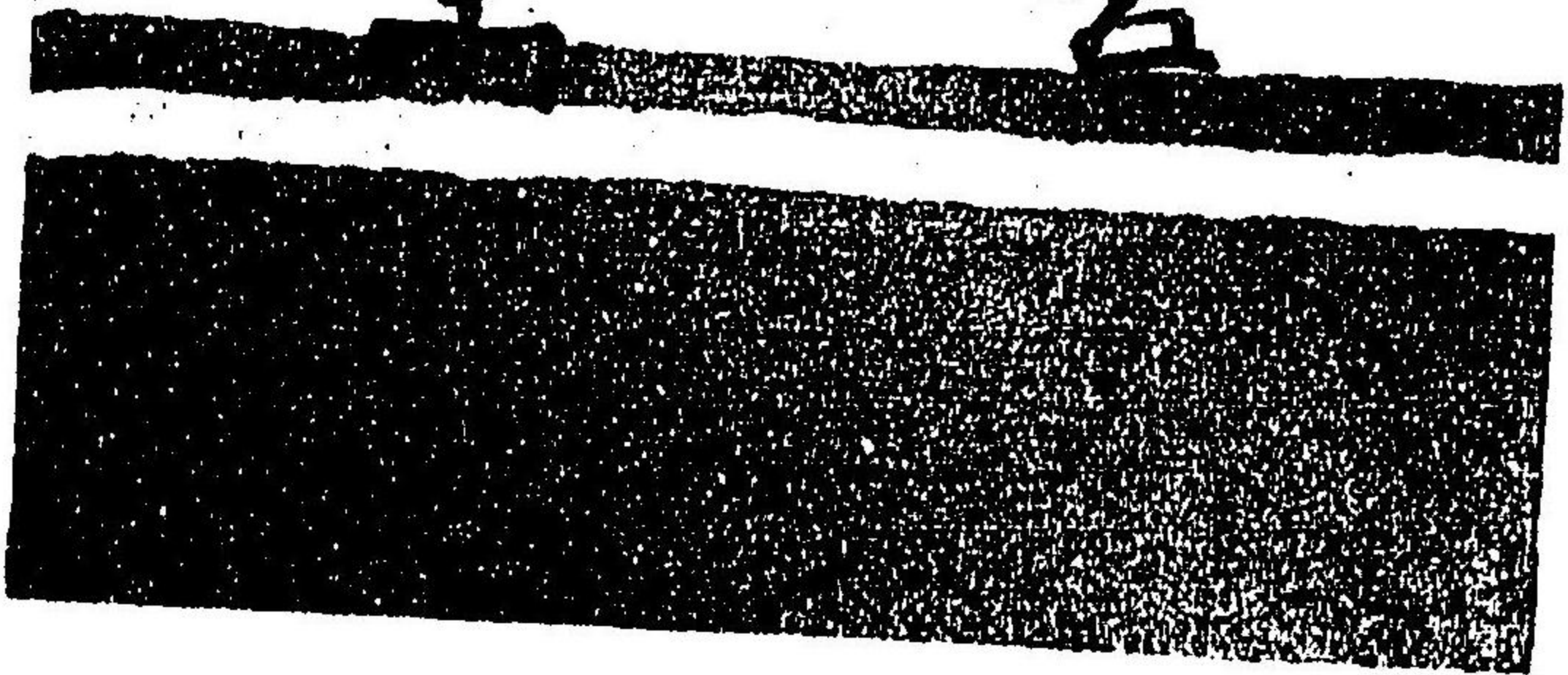


並水へ港遠目や
 水雨晴れて
 碧

印



去來妻
 はなむけに
 笑初時
 碧



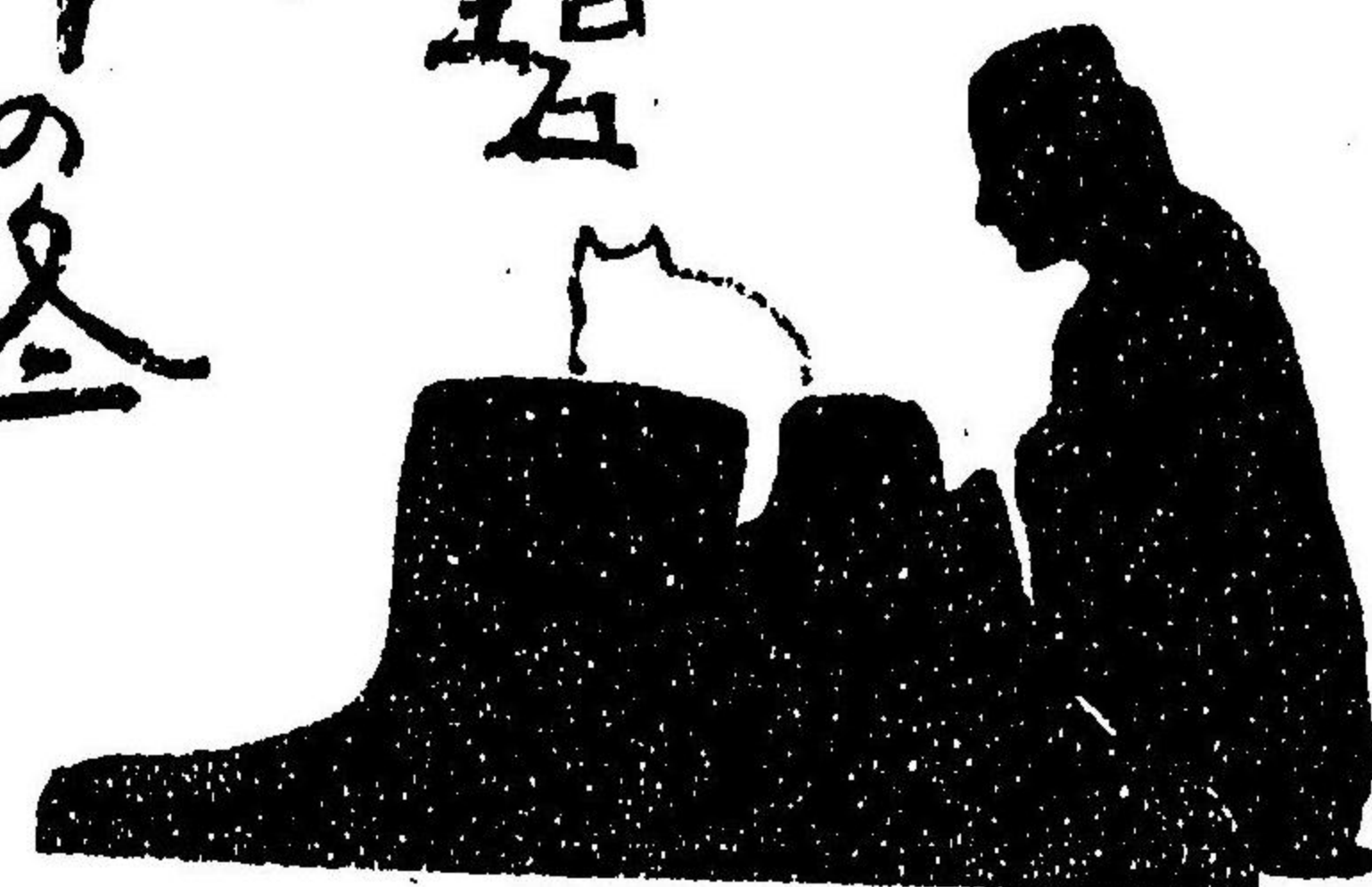
灯置

を

暗んずる書物

瑠

夜半の冬



四季四十句

春

望怡桐

熊の来て牛鬪ひ霞は
朝寝す異な旅人や温む水

雉罨子かくりも狐食みまけん
春雨や何處も君の不退轉
椿谷蛇の地ありて山路かま
水買うて分つ蛭や隣同士
春の雪寸積むといふや馬のり
こたびは夫婦して暮らたり宵の春

馬酔木咲く奈良の戻りや花巡王
屯田の此脩解く頃や歸る佳

夏

月日渡の湖の眺めや端納涼
又山石を清氷なかりけり
官命の伐る檜山あり雲の峰

噴火後の温泉よ住ま家や閑古鳥
演説をして瓜貫か避暑の宿
大原よ山邊の瀝や短作り
出干の寺よ掃苔の供養かな
河骨の吠こや羊々蓮のなまけ
庵よありて風飄々の夏衣

車馬行くも城の瞰下ろす夏野かな

秋

糧と兼せてひそかなる舟や三日の月
寮山より許小大屈きり田主かな
師と追うて霧務晴る人河渡らばや
露よ来て繪天井見よ小寺かな

二本づゝ祭幟や渡り鳥
秋風や去勢かせり馬といふと見
並松のハタと依られぬ秋の水
桑も梨も将火め作しや菊の村
新蕎麥々や其る筈なき盤も横はし
川口の塞がし冬も隣りけり

冬

短日たさそいれ出ひーかげ詣り
牡蛎船もありし文来さ佳よりを
手をかあせむ睡魔の敵も火桶かな
霜風来し濃き紅葉見ゆ向ひ鳥
留錫のね物好みや無汁

納豆の甘きはあれど未わろき
 積業の三つある庭や冬牡丹
 日頃寄せぬ澹かとりや鳴く千鳥
 綿入の肩あて尚も鄙ひたり
 春待や宿病不堪へて憂ふ事

俳 畫 論

中 村 不 折

第一章 題畫の心得

第一 緒 言

回顧すれば明治二十七八年の頃子規と余と小日本編輯局樓上で折々
 子規が俳句を作つて余が畫をかいたり又其反對に余の畫に子規が句
 を題するといふ鹽梅に俳趣味の交換みたやうなことをやつて居つた
 それからだんくゝそれが進んで來て古人がこれ等のことについて研
 究した跡を尋ね或は今後如何様にせばよろしきやなど、互に討議し
 たことなどもあつたそれで先其當時の事から考へやゝ秩序を立て、
 簡略に俳畫の心得ともいふべきものを陳べて見やうと思ふ





第二 翻譯的

二

普通俳書界の情態を見るにまだ第一期といふ階梯に居るやうに思はれるこれは翻譯的とでも言つたらよからふか最初俳人が俳句を作るそれへ書家が書をかくそういふ場合に最初の句の意味を其儘畫がくので例令ば古池や蛙飛込む水の音といふ句の下に蛙が池へ飛込んで居る畫をかく或は其反對に畫の意味と全じよう句を書き副へるといふ類だこの仕方は甚だ幼稚のもので古人にも此類のを澤山見受ける十中の九迄は此類の畫讀だが實は此翻譯あるものは前に働いたものゝ意味は後の譯者には逆もあらわされるものではあゝ西洋の詩を和譯しても原詩の意味は顯はしつくすことは出来ぬと同様に和歌の眞味は西詩に充分譯し盡すことは出来ぬやうなもので此等のことは誰でも知つて居る原作は其作者の熱血の塊まりであるものが譯し



た人には單に其聲色を使つたといふことにしか止まらあゝどんなに名人が翻譯しても原作の通りに出来るものでないこれ等の題畫は原作のそばへ下手な翻譯を書き添へたやうなもので美術的價値のないのは當然それから又俳句と畫と同意味のものも二ツ並べるのは重複の嫌もあるいくら古人に此作例が澤山あつても断じて此翻譯的の仕事は避けられた方がよからふと思ふ

第三 謎的理屈的

それから其次には謎的理屈的等の仕事があるこれは翻譯的よりはよいが純粹の美術眼から見れば聊まだ不感服の處があるやうだ芭蕉翁が奥州行脚の折羽前の山形で畫讀を要求された一例をあげて見ようそれは紙の右側に「三」といふ字のやうなものがあつて左側に「二」といふのが書いてあるうして右の上には右風羅神左の上には左かつ

三



ら男と書いてある翁はつらつらこの異様な符號をながめて居たがやがて筆をとりて中央に「裸身であらふものや月と風」と書いた即〓に几を冠すれば風とあり〓に月を冠すれば月となる〓と〓と相對峙して居る所から風に衣を脱せる〓と月の衣を脱せる〓とが正に角力はんとするといふことにしたのである元來〓或は〓は梵字かなんかかも知れない神様の符號みたやうなものかも知れない芭蕉翁が當意

四

東風羅神

と

は、この身であらふものや月と風

西うらり男

と

即妙は裸身の句と化したのであるふ先々俳書

題句の第一着としてはこんな處から入るのがよかるふかと思ふ前の翻譯的にまさる事數等だしかしよく考へるとこれも亦聊か感服出來



ぬ點がある

(しかし翁の題したやうな變を問題を解決するには謎的も亦止むを得ないとして又翁の時代には謎的あとは上々の部ならん)

それは最初にいふた謎的といふのでや、美術趣味の範圍から脱して居るやうに思ふのである理屈から來たもので自然の眞趣味とや、隠れて居るのである其謎的理屈的も亦美の方から言ふと矢張幼稚たるを免れないから少し研究して見るとだんくイヤになつて來るやうだ

どうしても美術は他く迄も謎や理屈は避けて欲しいしかし俳書題句等を翻譯にもあらず理屈にも據らずとすれば如何なる方面に向つたらよかるふか

第四 連 想



こゝに一ツの句があるれば月夜の句だそうしてこれに言を沿ふるとする如何にせばよきや已に翻譯の不可理屈的不可とすれば其他によりて仕事をせねばなるまい月といふものから色々連想が起る其連想を畫としたらどうだろふか、月から搦衣を連想する、女が衣を搦つ畫を沿へたらは如何、此反對に搦衣の畫があるとすればそれへ月の句を題するも面白かるふ、尤もこれは單に例を示した丈で搦衣に月などは已に陳腐の嫌があれば何か外に寫生から得た面白いものを題し畫くとすれば餘程面白いものが出来るだらうと思ふ、古人金鈴舎道彦が虫屋が虫を逃して捉へんとして居る圖をかいて上へ「三月月も見る間あるもの角田川」としてゐるのは、句畫の巧拙は兎もあれよく題畫の真意にかなふて居るやに思ふ、先題畫の第一着としてはかくの如き方百から入るのが捷徑にして且正則のやりかたと思ふ

第五 變化

前條は連想なるものを説けり此條には其變化といふものをいはんと思ふ、前條は正道を説き此では奇道を説く、正奇交至つて真正の美術趣味が發揮される前の月の句を又例に引くが、前のは月の句の連想を直ちに畫とするのであるがこゝでは月といふものを一ツ隠くして見たらどうだろふかといふのだ、明船々たる月を杉の木蔭に隠くして仕舞たらどうだろふか、此仕事も亦一段趣味のあるものだ、謎的もひねくれるのだが、理屈に陥つて居る、これもひねくれるのだが、理屈を避けて自然に脩ふのだ、美的にやるのだ、美的のひねくれ方は旨く行くとたまらぬ程よいものだ、モーツ例せば漁翁が舟を漕いで引くそれを態と其舟を揚へ繋いで見せよふといふ風に運ぶ奇道を行つたならば餘程面白いものが出来るだらうと思ふ



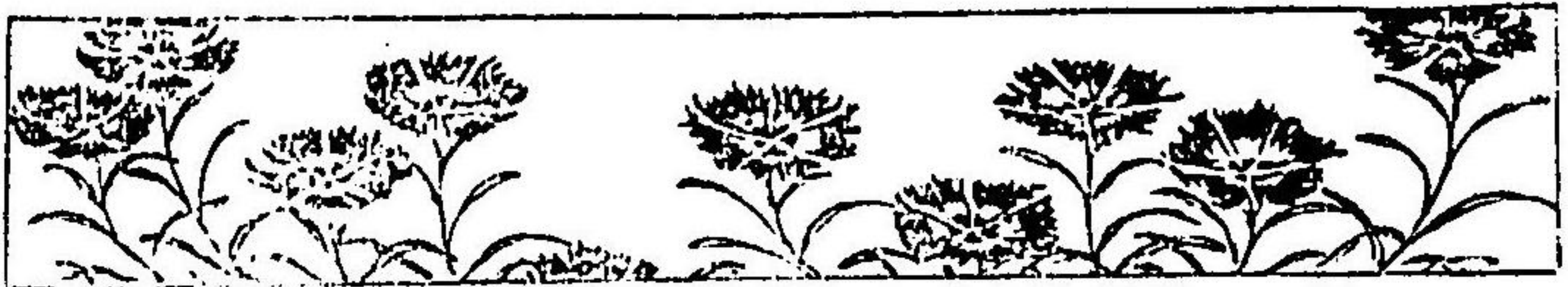


第六 對照

八

對照的の作物は亦大に趣致かある對照的とは梅に櫻桃に李といふや
り方例の漁夫の畫に樵の讀を持つて來るかぞは面白からふこの對照
法に面白い話しがある所は忘れたが京のある寺の杉戸へ探幽の繪を
需めた探幽はそれへ李白の前面を見て居るのを畫いたはたのものに
は何の意味やら一寸わからなかつたがそれは庭前に小瀑布がかゝつ
て居るのでそれを見て居る圖なのだ天然の風致と對照して李白をか
いたのであつたもしもへば畫工がやつたならば矢張御規則通り其杉
戸へも瀧を畫いて仕舞ふたのであろう探幽が對照の妙をつくした仕
方は今日迄も美談として傳はつて居る

第七 反對



變化とも少し違ふ反對といふもの、面白味を説かふしかしこれは初
學には餘程六ツケ敷い奇險な事た例へば洋々たる大海原の畫に却て
重疊たる山岳の句を題するといふのだが下手にすると全々無關係の
ものとある無關係のものをやつては題畫といふもの、價値がないだ
ろうしかし妙は言外にありとかで題句題畫の極致は其關係するが如
くせざるが如く無縁の如く見えて縁あるべくといふ所にある旨く此
反對が出来れば俳畫讀句の能事畢れりといふてよかるふ

第二章 畫風

第一 原流

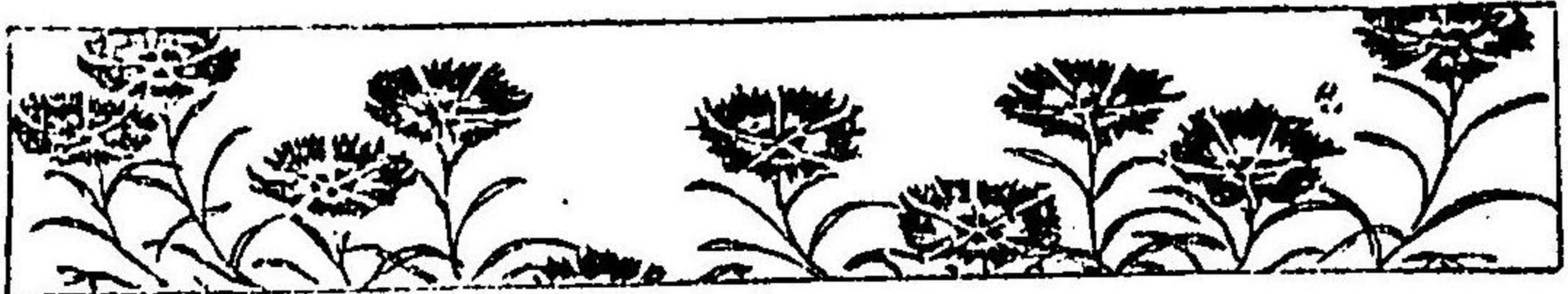
俳畫の起りは何時頃でそれから誰れが先祖だろふか平たく言へば俳
句あつて以來の事だがだん／＼研究して見ると遠い昔の鳥羽僧正の



信貴山縁起や、將軍塚や、鳥獸畫卷などは其先頭ではあるまいか、土佐の繪巻物にも幾分かは其原流が探される、宋繪の將來から、牧谿や、梁楷の畫風も大に原因になつて居るふ、足利時代の三阿彌(藝僧相)なんぞは時代も追々接近して來て居ると共に其關係も親密になつて居る、雪舟雪村の破墨法もたしかに俳畫の先頭となつて居るだらう

第二 森川許六

俳畫と銘を打て出たのは實に森川許六が始りだ、許六は江州彦根の藩士で芭蕉の門に入つて俳句を學び其堂奥に入つた所謂蕉門十哲の一人である、畫は狩野安信の門人だ、遺品としては渡邊華山の模した枯木寒鴉の圖があるが頗洒落なもので畫風は純然たる狩野といふてもよかるふ、華山も五老井時史の風を脱せずと評して居る、五老井は許六の號だ、正徳五年八月没した芭蕉は自分が許六に俳句を教へてうして



許六から畫を學んだといふて居る芭蕉も洒脱な畫をかいて折々讀をして居る、梅が香にのつと日の出る山路かなとかいて下に坊主と梅の花をかいたのが和漢名畫苑といふ本の中に見へた屏の畫は則られた

第三 松花堂

松花堂は是より先に俳畫といふ名の出ない時分だが或は許六よりは俳畫らしい仕事をして居るかも知れぬ、松花堂は男山瀨本坊の僧で紹乗といふ名だ、修道の餘畫を學ぶ畫は當時の三筆寛永の一人といはるゝ程の名人で大師流の蘊奥を極め畫は狩野山樂及山雪に習ふて後に其範圍を脱し洒灑趣凡の一機軸を出した遺品は澤山傳はつて居る布袋、寒山拾得などは特に傑作が多い、いづれも今日から見ると俳趣味を帯びて居る自分では俳畫といふ特別のものを畫くつもりではなかつたらうが自然と其上乗のものが出來て居る、松花堂には乘惇、憲乘

などの門人があつて其衣鉢を傳へて居つた寛永十六年九月歿した

第四 本阿彌光悦

光悦は瀧本坊同時代の人で瀧本坊よりは三十年程先に生れてそして寛永十四年歿した是人も書道の達人で同三筆の一人だ陶器漆器等の名工で裝飾的の智識の非常に發達した人であつた書は始は海北友松を師として後に自然の草木鳥獸に就て研究し一の裝飾的の繪畫を創成した有名の光琳も實は此光悦の衣鉢を繼いだのだ大體色の濃いものが多いが中には墨繪の俳的のものを見る中々旨い松花堂のは飄々を主として光悦のは周到で簡易にやつてのけて居る

第五 英一蝶

一蝶と來ればモツ本物だ自分も俳句を作つて居るそれから門人等と



題句畫讚の研究は中々やつたものだ余は此社中の題畫俳句集の出版物を藏して居るが面白い仕事をして居る今其一端をかゝげて見よふ
鉢叩の繪に
はつ霜やはや橋の上鼻はしら

全角畫

晋 我

小供の手の平を墨にて捺し

空二日湯島龜井戸供に親

南子畫

同 人

謠本

竹のこをぬくや寒夜の聲いぢり

支流畫

同 人

衣服に柳の模様

土知良へも柳は戀の姿哉

常

松 吟

女が風呂敷包持つて行く圖

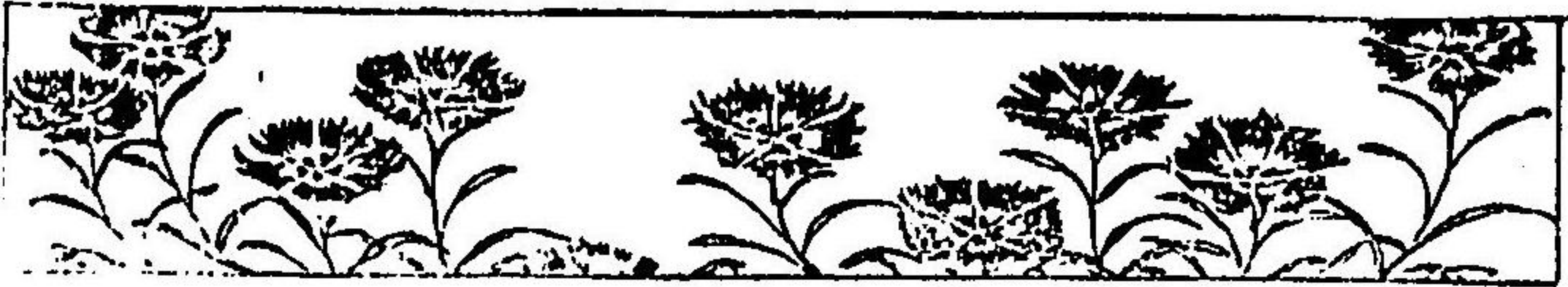
やぶ人のおくり手もなし靈昭女

菱川光伴圖

文 町

小舟と蘆の圖

蘆の穂や骨まで通る風の聲



英一蝶畫

雁山

こんな風に出来て居て句や畫の巧拙は兎もあれ中々題句としては進んだものだ一蝶は江戸の人で狩野安信に繪を學び後に一機軸を出した其滑稽趣味は古今獨歩の觀がある俳畫としてはあまり上手過ぎて却て面白くないかとも思ふが兎に角徳川時代に特筆すべき大家たることは何人も異議を挟むものはない享保九年に世を去つた

第六 立 圃

一蝶のすこし先に京に雜屋人形屋立圃といふのがあつた天稟洒落な人で書畫共に妙域に及んで居る土佐風狩野風浮世風といふさまつたものを習ふた譯でなく只すきにまかせて臨模したやうだ自然と俳趣味を帯びて面白い遺作を度々見ることがある

第七 古 澗

古澗は和州郡山西巖寺の僧であつて後に京の智恩院の住職となつた晩年東山西岩倉に住んで居つた畫を狩野永納に學んだといふが其遺作を見るとちつとも狩野派の上下的の所が発見されない一點一畫渾然として俳畫の神境に入つて居る後世俳畫をいふもの古澗に指を屈せぬものはあからう又古澗を崇拜せぬ俳畫家もなからうと思ふ享保二年六十五歳で入佛した

第八 蕪 村

俳畫は蕪村に至つて大成したといふてもよかるふ蕪村は一蝶のやうな本當の畫家で大分緻密なものをかいて居るが其俳畫は實に省略したボンヤリした面白いものだ此點は一蝶の及ぶ所でない蕪村は自分

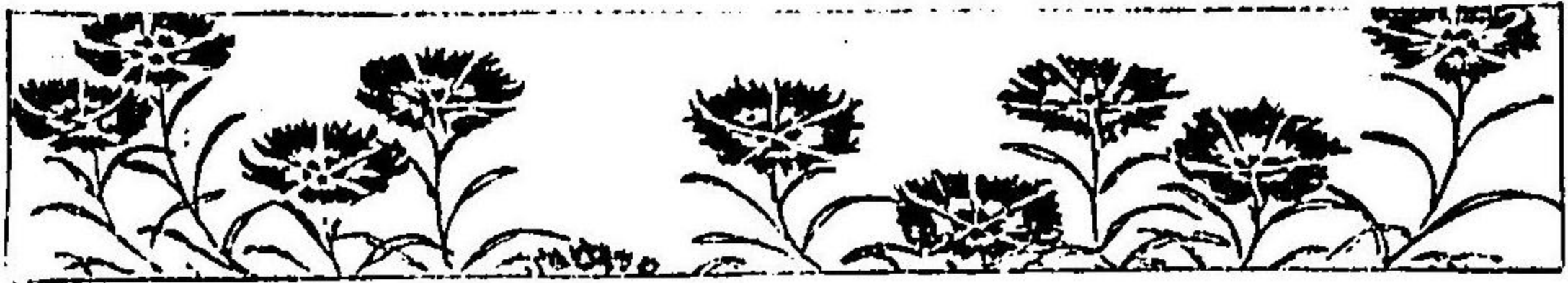


が俳句の名人であつた丈に殊に俳畫の神髓を得て居ると思ふ門人の
 吳春の俳趣味は蕪村直傳であるふ九老といふのも矢張蕪村の門人で
 先生をつくりといふものをかいて居る蕪村姓は谷口攝州天王寺村に
 生れて居る天王寺村は蕪の名所なれば蕪村といふのだらうだ後丹後
 の興謝に住んで興謝蕪村と改めた畫は元明名家の風を學び後天然の
 趣致を極め毎に其意匠の奇抜と清新ある只敬服の外なし其俳畫の
 如き眞に墨餘の戲のみシカモよく及ぶものがない程だ天明三年六十
 八歳を以て世を辭した

一六

第九 素 檠

蕪村と先後して信州の諏訪に素檠といふ俳人があつた此人が中々俳
 畫の妙を得たもので俳畫だけしかかゝぬが専門丈に或は蕪村の墨を
 摩すると評してもよい位だ前の古淵のたりを覗つて居るやうな處も



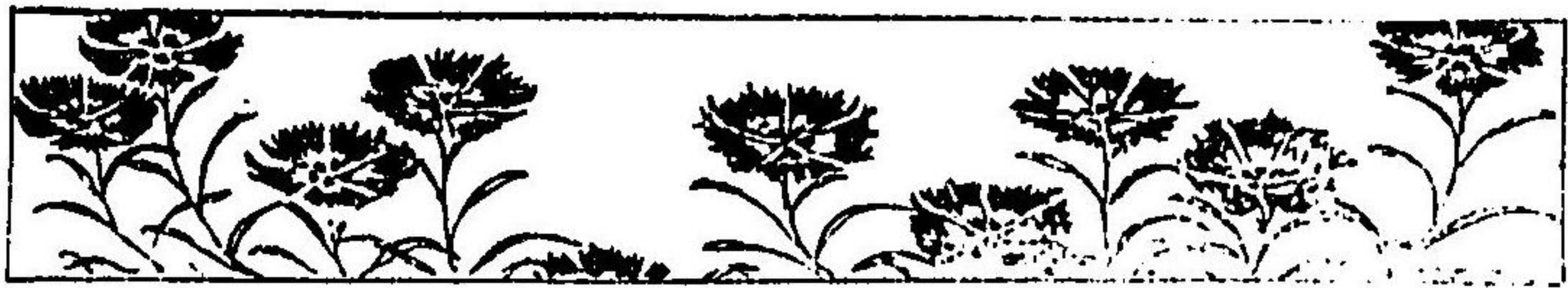
見へる遺作は諏訪へ行くと見られる

第十 光 琳 附 乾 山

尾形光琳は光悦から出て居て其略筆法は直に俳趣味を發揮して居る
 寫生から來て渾然化して凡人の企て及ばぬ神品が出來て居る光悦の
 如く着色裝飾の能手だけれども淡墨洒灑の畫も澤山畫いて居る弟の
 乾山も兄に次で面白い仕事をして居るが俳畫の方は或は乾山の方が
 よいかもしれぬ一體乾山の方が下手な丈仙味を帯びて居るやうに思
 ふ兄弟共蒔繪や陶器へ畫かせたら天成の妙味凡俗の批評を免さす實
 に有がたいものだ光琳は享保元年京都に歿し乾山は寛保三年江戸で
 なくあつた

第十一 仙 厓

一七



其後美濃の大垣に仙厓といふ坊さんが居つた後に筑前へ行つた天保頃の人だそうだが頗る禪機を得て居る書畫共に仙味飄々遠く人界を脱して居る逸話奇行の今に傳つて居るものも少なくない余は三四度其作品を見た丈だが其畫幅に對する時だけは自分も仙人の仲間入をしたような氣がした

第十二 華山の俳論

渡邊華山も氣骨稜々ともいふべき風のそうしてごく品のいゝ俳畫を畫いた一點俗臭がないのは敬服だが實はモウ少しボンヤリして欲しい又嘗て俳畫論を著したそうして各作家に就て寸評を試みて居る華山以前こんな著述のあつた事をきかねば恐らくは華山が始めであるう此著は古人の畫を臨寫してそを一々批評し一篇の俳畫論を草して其序文にしてあるあまり大部のものにもあらざれば文章丈拔書する

尾形乾山
別に深省
と號す
英一蝶
森川許六
瀧本坊昭
本阿彌光
悦
離屋立圃
奥謝蕪村

ことにした

俳諧畫序

俳諧繪は唯趣を第一義といたし候元祿の頃森川許六あどあれども風韻は深省あどまさり候此風流の趣は古き所にはなく瀧本坊光悦など防りなるべしはいかゝるには立圃見事に候近頃蕪村一流を防めおもしろく覺候かれこれを思ひ合描くべしすべてこれを人にたとへ候世に事かしくぬけめあく立振舞物のいひざまよきはあしく世の事うとく訥辨に素朴あるが風流に見へ候通この按排を得香込あるべし

散人 華山

本阿彌光悦と書し櫻樹の本のみ墨にて畫く

華山評して曰く光阿彌は寫生より趣を得たり

一蝶畫趣として鶯が釣瓶の縁に止まる畫

評に曰 信香の畫は安信に従ひ新意は菱川より脱化來るに似たり



許六寫意と書し枯木に鳥のとまりたる畫

評に曰 五老井時史の風を不脱

松花堂書法と書し茄子二つを畫く

評に曰 惺々翁は法を遠古に取り務て時史の風を脱す

立圃畫意と書し老人讀書のさまを畫く

評に曰 雛屋は松花堂に辨門するに似たり

蕪村寫意と書し盆踊りの圖

評に曰 夜半翁は古湖の意を取に似たり

其他には自から畫き自から讀を書したるもの二葉一枚は朝顔を畫き朝顔は下手のかくさへあはれありと書し他の一枚は向ひ風に馬に乗れる人と其供とを畫き、齋の香もいふたつかたにあまくさしと書いてある

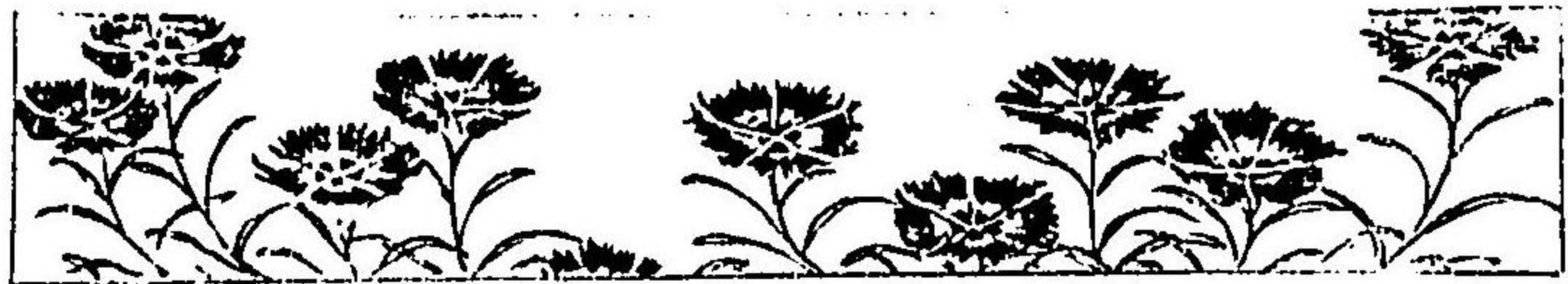
所謂寸鐵人を殺すの趣がある

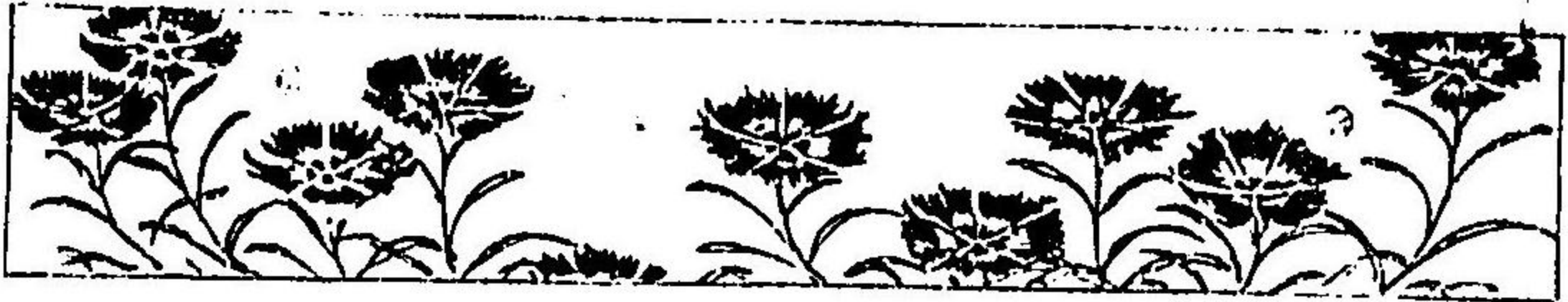
第十三 近世

近世では鐵形、蕪齋、安藤廣重をど一寸面白い、一九馬琴などの小説家の畫も俗氣があくてよろしい、光琳一派の抱一、其一などの草畫によいがあるが、柴田是真が草畫としての研究は澤山やつて居つて遺作も随分多いやうだ、是真のは馬鹿氣た仙人染た様な事はないが、其代り意氣な氣の利いた江戸子風の奥の手を出して居る白隱禪師の畫も俳趣味に富んで居ることは寧ろ禪味といふ方だろうが、どちらにしても面白いものは矢張面白い附記して俳畫史の卷尾となす

第三章 畫法

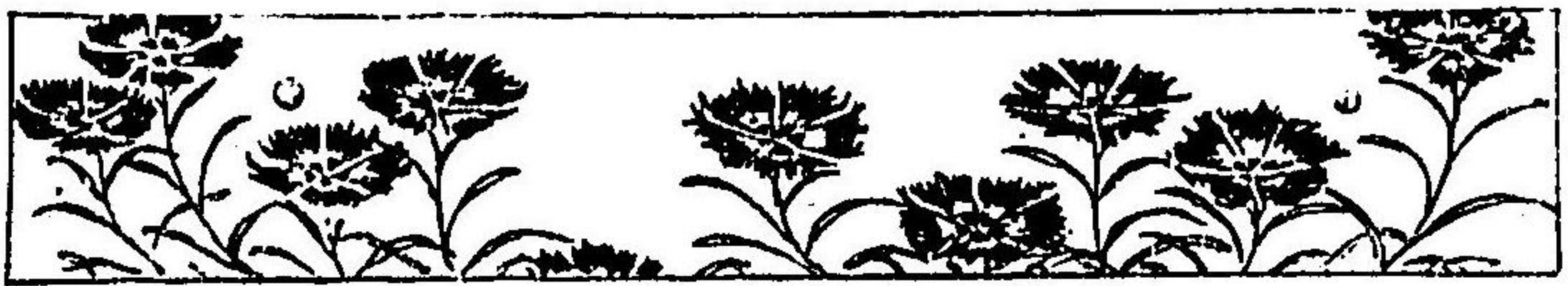
理屈を云ふだけいふたこれから實際に就て少しく言つて見よう、しかし畫の事を口の先でいふのは所謂席上の水練で云ふものも聞くもの





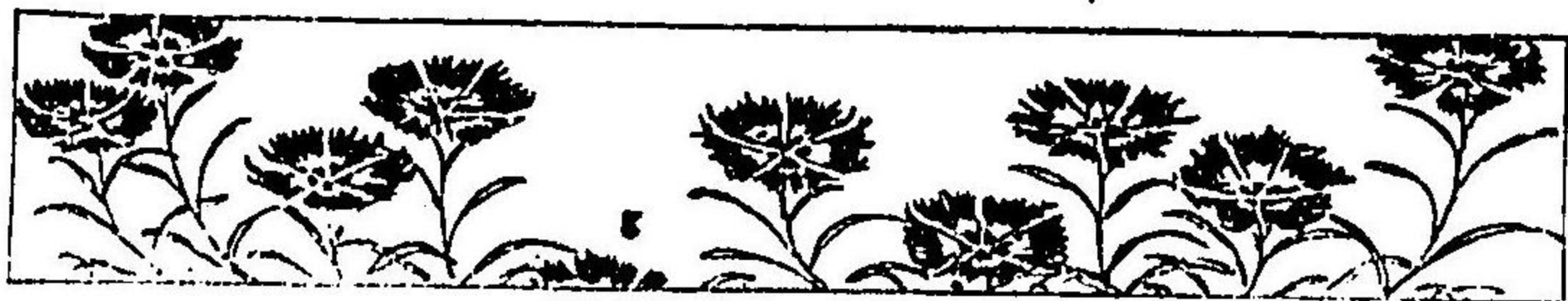
もはがゆく覺るもの、そうかと云ふに俳書學校を起し變手古な非常識
を形を教ふるとか書くと云ふのも仰山なはかし俳書はそれほど面
倒なものであるまい尤も此面倒てない面倒にやらぬと云ふのが俳書
の神髓かも知れぬ、不規則なものをかくのが主義で規則によるのは他
山の石と思へばよい。

大凡のものには目的がある標準がある俳書法の標準といふたらどん
なものか無標準といふのが標準だのだ此無標準を標準とするまでに
は多少四角に削つて右は八丁大師道などといふ標準に従はずばなる
まい四ツ角にまごつてて巡查の厄介になるやうではまだく無標準
を標準とする境涯には遠いどんな書でも俳書でも狂書でもはじめの練
習は正確な寫生が必要だ鉛筆を持つてつゝ小口から寶物と間違はぬ様
に書くのが初步の修行滑稽の眞趣味は却て眞面目の人のの方がわかる
と同様俳書狂書の本統の所は却て眞面目に形が書けての後の事だ、正

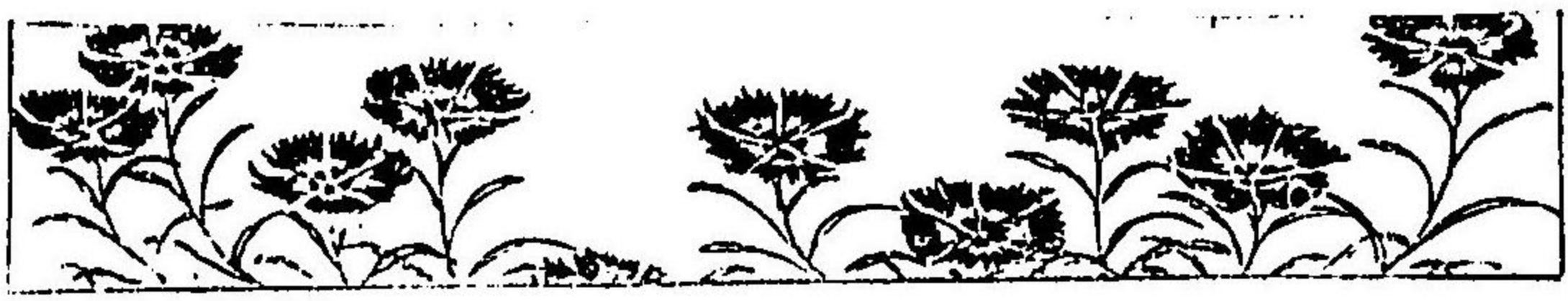


則の書を教ゆる所は澤山あるそれらに關する著書も随分多ければ今
爰で云ふのは省略して假に此鉛筆寫生を卒業したものと見做してそ
れから以上の事を述べやう、しかしそう肩を凝らして聞かなくともよ
い矢張俳書的態度で聞て貰いたい、俳書法の終局は實は下手に書く
といふ處にあるのだ、下手に書ければそれで俳書の目的は達せられた
と云ふのだ前の渡邊華山外史の俳書論に『なるべく悪しく書くべしお
もしろく書く氣惡し之れを古人に比するに世事かしてくぬけめなく
起居ふるまい物のいひさまよきは悪しく世の事うとく咄辨に素朴な
るが風流に見える通この按排を得呑込みあるべし』と云ふてあるのは
正に俳書の秘蘊を吐露したものであろう。

小供の書いた字を見ると六朝晋漢の風骨があるそれが段々習ふに従
ひ生長するに及び漸次に其面白い處がぬけて上手なハイカラな字に
化けて仕舞ふ書でも矢張こんな工合で素人が却て俳書などはよい處



があるかもしれないが此素人も習つて居る内にいつしか黒人に化けて普通の書になつて面白くもなんともなくあつて仕舞ふいやはやどうも始末におへぬものだこれは何人でも免れる事の出来ぬ道筋だとすれば何とか之れを救済する良法のあるものだらうか……ある……古人がこんなものを書いて置いたそれは(幸手)圖の上方に上手と書き下方に下手と書てある此下手の處が初學の首途だんく習ふて上手にあるに大抵な人間は此上手の處で成佛するらうだがモット向上心の強い奴は又だんくと進んで遂にはモットの下手になるのだらうだそうすればモウべたもの動きつこかい上手も下手も一通り卒業した金箔付きの下手なのだ、雪舟や雪村の書は此下手の處に居るので始めの下手は何人で通過するが一廻り廻て戻て來た此下手には到達するものは古來何人もあるまい、狸々曉齋葛飾北齋などは頂上の上手の處に到着したのみで一步たりとも下手の方面には向つて居らな



い、俳書は尤も技巧を抜きにした下手の奥の院に達せねばダメだこゝに變則のやり方がある一寸其天の岩戸の手力雄を頼むで來やう。町にぬけ裏と云ふのがある君子の歩く道でないやつだ君子の歩く大道を四角に歩るかすに變る所から目的地へ行く捷徑だ俳書法にも何だか此捷徑がありらうに思ふ嘗て碧梧桐が余の筆法を五月蠅く言ふので大分閉口した様だつたがある時余に向つて君は一にも筆法二にも筆法と云ふて僕等を器械同様に取扱ふ一體ろんな面倒な事は六朝にはない筈だなご、不平を鳴らした余は答へていふ筆法を嚴重にいふのはやがて無法に到る楷梯だ筆法をよく心得て後無法の妙がわかると云ふたら傍に乙字が居つて我々は無法から無法に遷る方法を研究して居るのだと云ふて笑ふた事があつた無法から無法へ遷るのはどうしたらよいか考へたらば良案が浮ばふか



習へば上手になる上手になれば俗になる俳味が失せるこう考れば上手にならぬ工夫をして俗にあらぬ様にするといふ事が第一の策戦計書だが其上手にならぬ様にするにはどうしたらよいか
上手と云ふものは見場のよいもの人の上手を好むは蟻の甘きに就く様なものだそれ程好ましいものでも實は俗なものだとすれば是非共避ける工夫をせずはなるまい、近頃醫師に對症療法といふものと根本療法と云ふのとあるこれを俳書法へも應用して上手排斥法をやつたらどうか對症療法としては上手にかゝぬくと心掛けるより仕方がない上手と云ふものを蛇蝎の如く思はねばならぬ應舉や景文や乃至北齋歌麿など云ふのは邪道だと心得て居るがよい根本療法と云ふも歸する所は對症療法と同じ様なものぢやうしてこれは腕の方でなくて頭の養成に屬す讀むものや、見るもの、聞くもの、悉く風雅な古拙なものゝみに氣を付ける必要がある奈良平安の古文書建築遺跡書畫彫刻は



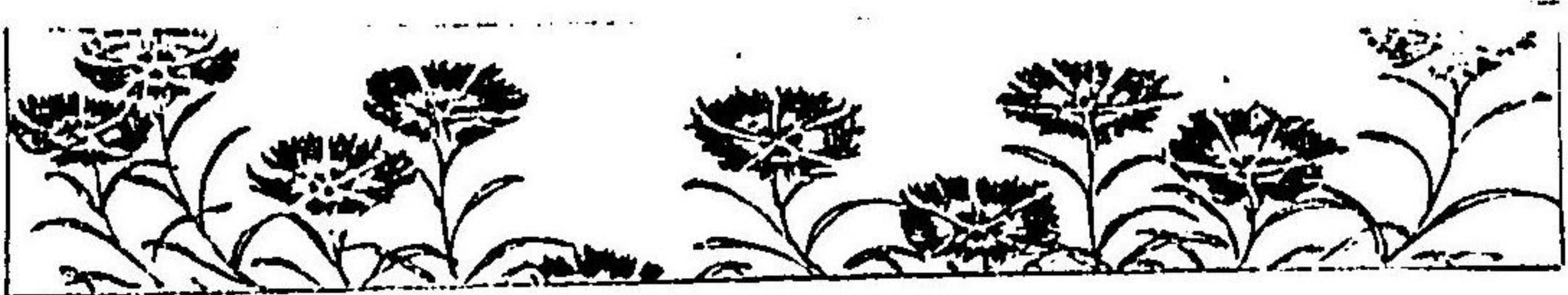
更なり支那三代の古銅器も諸氏百家の古文學もこを養ふには絶好の手本であらう、周圍の器物より自分の住居迄無器用を無粹なものを選択して精巧なものや意氣なものは遠ざける工夫が肝要だこんな風に實際やる事が出来るとすれば正道を行かうが間道を行かうが到着する點は同一の好結果を得らるゝだらうと思ふ

第四章 題の實價

題書の價値は陳腐に流れず斬新にして奇抜なるべく美術的のものたるべし言ふて仕舞へばこれ丈けだがこれが中々困難な事件でいざ實行と云ふ場合には思ふ通りはやれるものでない、しかしこゝに一つの秘訣があるが此秘訣を旨くやる事が出来れば自由自在ごんち場合もごんち人がまごつて居るときでも自分丈は平然として多々増々辨ずると云ふ態度でもつて面白いものを續々こしらへる事が出来る



それは第一番に寫生をするのだ。此寫生と云ふ事がよく出来れば、天地萬物片端から取て自家樂籠中のものとなし、恰も泉の涌き出す如く、つてもとつてもとりつくすことの出来ぬ程面白いものを書いて見せる様になる。寫生の効力の著しいのは前に述べる通りであるが、此寫生と云ふ事に入るのが、實は普通大抵の苦勞ではない。よい加減の所で匙を投げて其堂奥に入らずに敗北する人が少なくない様だ。寫生と云へば外界の事物を客觀してそれでよい。鹽梅にスケッチブックへ止めればよいので、外に準備も何もいらぬ様に聞ゆるが、實は直接には必要がないが、間接に頭を練て置く、と云ふ必要はたしかにある。我々が洋行前に寄合て裸體寫生をした事があるが、其時には大した不都合はない様に思ふたが、親しく西洋の正法を學んで來た後に見れば、殆んど物に成つて居らぬと云ふ始末だ。イラスト事に苦んで居つて無駄な骨ばかり折つて緊要な事件はみんな逃がして仕舞つてそれで平氣で居つたのだ。



解剖かといふものは醫者のそれとは違ふて、只外貌に顯はれたのを其通りに書いて居れば、子細はないものだが、内部の構造がよく分つて居らん時は、決して外貌が正確にわかるものでない。正確な外貌を得んと思ふならば、どうしても内部の構造の研究が必要であらう。

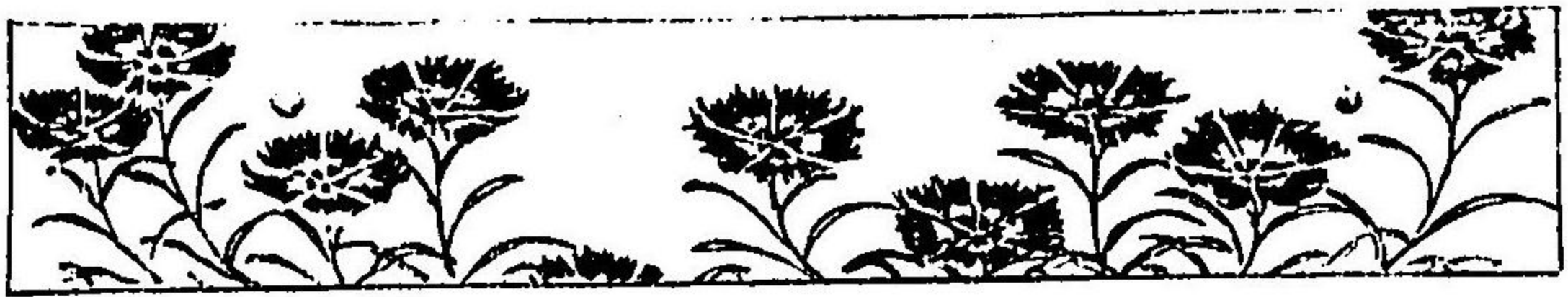
これは只解剖を例にして、題畫の秘訣を説明したるのみにて、俳畫に解剖なぞ餘り必要もなからう。却て解剖なぞはやらん方が、俳畫などにはよいかも知れない。尤も奇警な目をもつて人物の解剖的價値のある線を俳化して仕舞ふなぞは、面白いかとも思ふ。俳畫には解剖なぞ云ふ四角ばつた事は、大禁物なれども丸くこなし、使へば却て意外の効を奏する事もあらふ。

頭の練習間接の準備は、實地寫生の時偉大の効を奏す。古人が萬卷の書を讀み、萬里の道を行くと云つたのは、こゝの處だらう。書といふものゝ、古人が實驗苦心した跡を見るのは、實地に臨んで寫生するといふこと



三〇
、相俟て非常に有益なものだし、かし東洋人は一般に書籍を尊重し過ぎる弊があるのでいかぬ、又其反對にある先生達は寫生をのみ尊んで書籍智識を丸で輕蔑するものがあるが、これは兩方共間違て居るだらうと思ふ、書籍には随分又聞き抜き書きの様なもの、が大部分を占めて居るけれども、實驗苦心の著述も、少くない、これ等は余輩が發見する前に已に幾多の發見をして居るのなれば、其篤見を基礎として、猶其上に幾層の發見をしたならば、古人の知らなかつた、古人以上の面白いことが出来るだらうと思ふ

色々の人の著書を讀んで頭に蓄へて置て、それから實地に臨んで寫生をする無意味の場所も有價の地と變せしむる事が出来やう、讀んでは寫生をし寫生をしては讀み、古人と競争する様なものだ、一草一木も化して貴重なものにして仕舞ふことが出来る
併て工部省に美術學校にあつたとき、伊太利の名工ホンタネジとい



ふ人が書を教へて居つた其時に、小山先生や淺井先生等が此ホンタネヂー畫伯から教を受けて居つたのだ、ある時ホン教授が先生等に丸の内を寫生すべく命令した、先生等はスケッチブックを脇挟み三三五五各方面に向ふたが、一向寫生する好場所が見當らぬ不平たらしく、下宿に戻つて翌朝登校大にホン教授に向つて不平をいふた、其時ホン教授は毅然として先生等にいふそりや君等が悪いので、場所の悪いのではない、よく活眼を以て寫生したならば、君等位の人數では、一代や二代ではかき盡すことが出来ぬだらうといふたらうだ、所謂冀北の野千里の馬はいくらでも居るが、一人の伯樂がないと歎じた古の金言もこゝの所である

第五章 運筆法

俳畫風のもの、必要條件としては此運筆法が一番に數へられるなり



丈け簡易な面白いものをこしらへようとするには寸鐵殺人的のごく
きびしい四本か五本の線で事をきめて貰いたいが俳畫の特別な要求
である俳畫の生命はつまりこゝにあるのだ。こゝに彩色をして幾日
もくもかゝつてべた／＼塗つて居るなどは俳畫の價値でないのだ。
一氣呵成に下手な形を畫いてそれを面白がつて喜んで居ると言ふ
所に眞の風流が見ゆる其亦下手の畫を苦情も云はずに楽しんで見て
居ると言ふ所に眞の風流が見ゆるのだ。俳畫の奥の手はコゝの所にあ
る此氣合が呑込めん裡はイクラアセツテも駄目だ。

(フランスの自然派畫工ユミレー氏曰最初の五本でまとまらぬもの
はいくらつゞいていてもまとまらぬ)

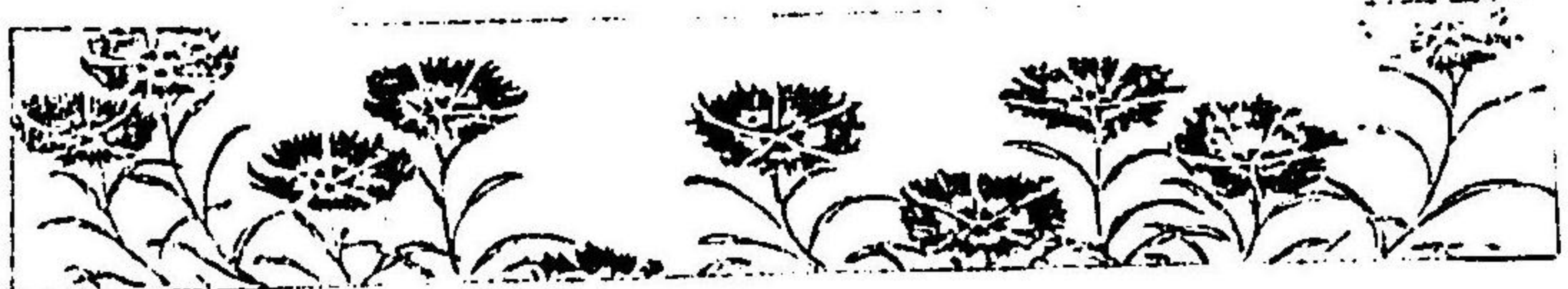
直接運筆法の参考としては何がよいか下手な畫をかくに参考の必要
もあるまいが眞に其下手の價値が解せられる迄には聊か讀畫の必要
があると言はねばならぬ實の處は下手の眞價はイツまでも悟られ盡



すものでないのだ。そうすると終生古人の名畫は見て居らねばならぬ
譯だ又一面から云ふと自分が立脚の地を定めるのも亦古名畫を學ぶ
と云ふ事が尤も捷徑法になる。雪村いふ凡て天地の形勢自然の幽玄を
見て書きあすこそ道の妙至と云ふべきなり亦古人の圖畫を尋問する
は是筆跡省略を見るまでにて自己の筆意には益とあすべからず設ば
我師なる雪舟の畫にても予が筆力には假り用ゐがたし若し尊び用ひ
る時にはこれ予が筆力にあらず故に畫は即形は萬象に倣ひ筆跡の省
略は師により筆力は自己の心意に留めて筆を振ふべきことなり云々
雪村の議論は實に適切だ余輩も亦如此心得で畫きたいのであるしか
し極致は極致として行き道は矢張り古人を學ぶより仕方がない古人
を學んで古人を出で天然に隨へ自己の筆意を出すと云ふことにした
いのであるはじめから我意でやると放縱に流れる古の聖典にはまつ
て出ることをしらぬは又愚な次第だこゝの處をよく考へて見ねばな

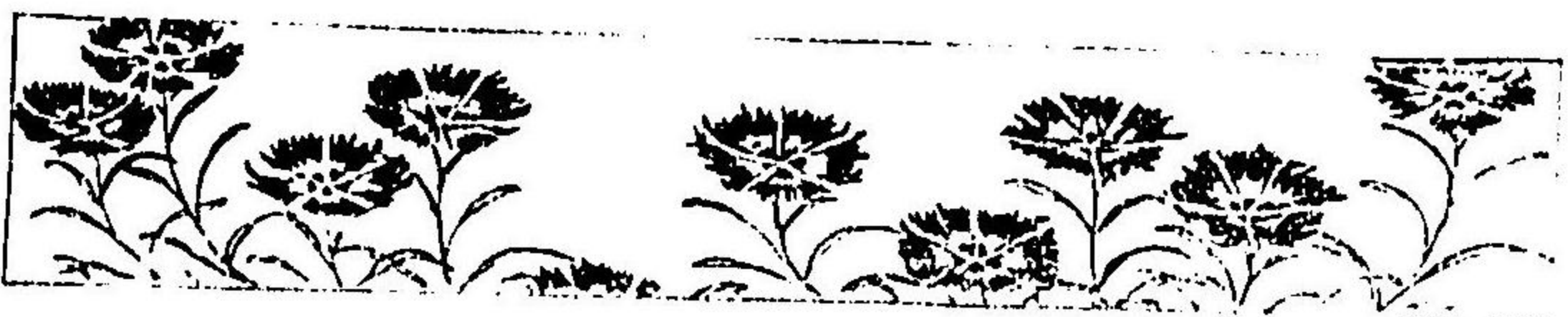


らぬ事と思ふ人の心は面の如しそれで人々みんな多少違ふ方面に進みたがるものだからつまり美術の妙味の有する處で雪舟と雪村の違ひがある爲めに雪舟は雪舟としてゑらく雪村は雪村としてゑらひ事をして居るもしもこれが全一方面的のみ向ふたならば我々見た様な下手なもの、仕事は誰も見てくれてがあるまいそれが天の配劑が面白く出来るので我々でも不折流の畫をかいて小さいながらも自分の田地を耕して居るのだ古大家雪舟と雖も不折流を畫かせたらば余輩よりもまづい不折流では兎に角余が日本一なのだこう考へて見ると樂みなものだそれで此自流を築き上げた楷梯として古人の畫を味ふ必要を感ずる澤山な古名家の中から自分の性情に合ふのを選び出して模範にするをうしてだん／＼自分のものをこしらへて行くといふことが勞少なくて功力の偉大なるものだらう牧溪の眞筆にして禪味津津たる墨畫は折々展覽會などで観ることが出来る實に此方面



を希望する人々には此上ない寶物であらう鳥羽僧正の洒瀉活潑なる鳥獸畫は此方面を希望する才子をして酔はしむべし若夫筆意の古朴にして渾沌たるものを願はゞ去つて古湖に奔るもよからう筆が雄渾重き事千鈞端正雅醇の風を好まば雪舟の門戸を覗ふべく一氣可成筆跡何等の執着なく光風霽月の赴きを慕はゞ雪村に則を取るもよからう瓢々乎として羽化登仙遠く塵俗を脱するの風を好まば相阿彌の輩を師とするがよからう光悦光琳等の横溢せる才氣は一寸模し悪いかも知れない結局書を讀み寫生をしをうして此古人を涉獵すると云ふ大秘訣を實行してここに俳畫の大成を期待するのだ

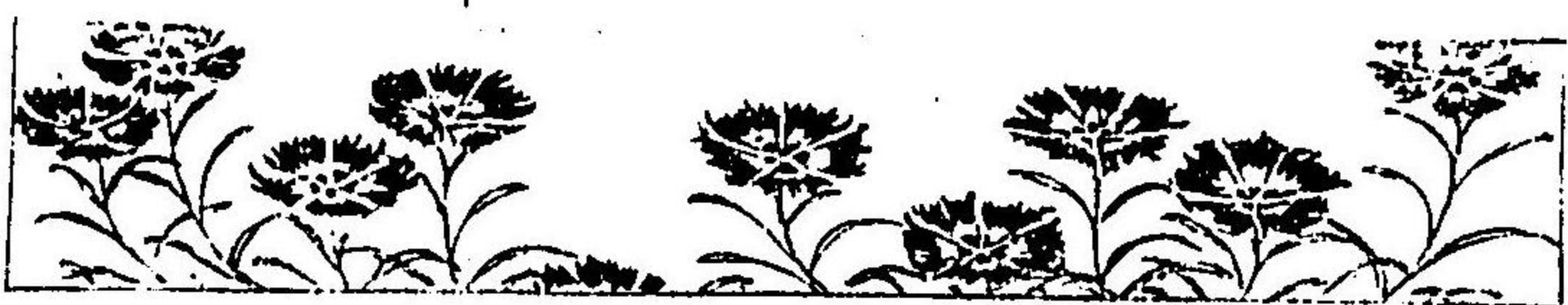
最も古來日本人の弊習として古人を習ふものも師(現在)の流風を模するものも遂に其型典の中に陥りて脱する事が出来ぬものが千人中の九百九十九人といひたいが實の處は千人悉かゝる境涯にまをついで居るやに思ふこれは必竟鍛鍊の不足と不勉強より起るので自分で一



三六
機軸出すと云ふのは非常な熟練と勉強を要するので薄志弱行の徒が及び至ることが出来ぬからだし、かし美術の眞價は其人間の面目を發揮するより生ずもし人の書を模寫してすむなれば何も手間費しに墨をすつたり筆を甜つたりせんで近頃流行の寫眞版か網目版で結構だ下手な眞似より尤も眞に逼つたものが何枚でも出来るでないか俳書なんというやつは殊に自家の筆致を顯はすべき必要がある他の繪畫よりは適切に其必要を感ずるとんち拙劣なやり方でも巧妙な模擬よりは尊いといふことがわからなければ駄目だ。

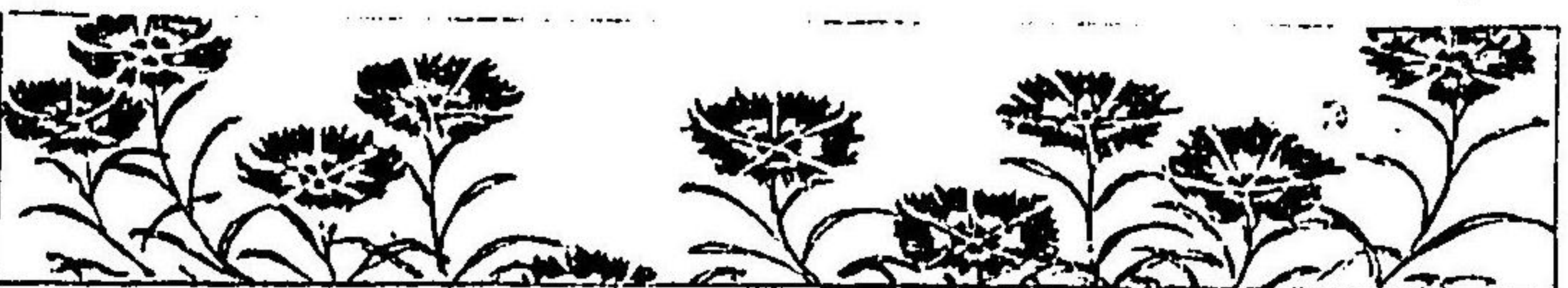
第六章 結論

曰想曰體曰筆之れで俳書の能事盡せりだし、かしこゝに一つ緊要なものがあるこれがなければ想がよくても體が整つて居ても筆が暢て居てもなんにもならぬのだ我々が六朝の書を學んで居るのをはたから



ヤ一形が曲つて居るのヤ一四角過ぎるのと色々批評するを聞くがどの評もどの評もみんな適切でない我々が文字が曲つたからつて曲げて書くを目的として居るのではないのだ又四角過ぎるからといふて四角あものを書く目的でないのだ目的でないものをつかまへて批評するのは批評の目的を達して居らぬ我々が書を習ふ唯一の目的は品位と云ふことにあるのだ此品位を保たせんか爲めに色々働いて居るのだ

俳書の目的も想や形や筆は實際枝葉の問題で大本は品位にあるのだ品位がなければいくら想が旨くとも形が面白くとも筆がのびて居ても要するに第二流のものたるに過ぎない一點一劃品位如何と心掛て行くが俳書の最終の希望であるのだ古名人の傑作として持囃さるゝものは實に此才氣の方面の産物でなくして品位の輕重問題にあるのだ



附記

此本に掲載せる碧子の俳句四十に對する俳
畫は目下揮毫中なれば追て俳畫帖と題し此
續篇として出版のつもり

不折識

俳畫論終

明治四十二年六月十三日印刷
明治四十二年六月十六日發行

特價金七十錢

不許	複製
----	----

著作者

中村 不折

發行兼印刷者

堀 昌次

東京市本郷區向ヶ岡彌生町二番地

印刷所

耕進 舍

東京市神田區錦町三丁目二十五番

發行所

東京市本郷區彌生町二

光華堂

發賣所

東京市神田區表神保町

東京堂書店

賣捌所

東京市神田區中西屋

東京畫報社 大阪吉岡書店

雅邦帖

發行の由來
各新聞の批評

不折先生講 碧梧桐先生題句

豫約出版
申込乞ふ

俳畫帖

木板 和裝

往復端書にて御申越被下候はば
代價體裁等決定特に詳細可申上候

右は本書の續篇として碧梧桐先生の四季俳句四十題に四十圖を不折先生が天下獨得の靈筆を目下揮毫中なれば當秋出版可致豫定なり此の廣告により御申越の方に限り特別減價を以て實費に近き點に於て分配可仕候申込多數ダケ安價に出來上りますから俳畫俳句に御熱心の方は早速御申込被下度候也

申込所

東京市本郷區
彌生町二

光華堂

永久的最良最好の進物 ● 紳士と
 貴女の娛友 ● 畫家の良師友

雅邦帖

特價金參圓八拾錢
 小包料內地拾貳錢
 清韓臺灣參拾五錢

緞子表金椽折本美裝畫帖日本獨得美術
 木版緻密極彩色雅邦紙印刷四季三十圖

次	目
喬松	雙鶴
春晴	岳雪
狙公	操縱
池上	鴛鴦
麗禽	啄花
喬松	雙鶴
春晴	岳雪
狙公	操縱
池上	鴛鴦
麗禽	啄花
上巳	清樂
名媛	推敲
山紫	水明
白沙	青松
奇峰	摩天
水邊	鴉鵝
浮家	泛宅
山高	塔小
詩聖	觀瀑
少女	嬉戲
猛虎	藏爪
海氣	滿樓
風伯	鳴枝
一竿	忘機
水亭	落雁
紅葉	村莊
田家	秋成
呦々	呼類
樹下	老村
氣溫	花香
穰々	有年
月下	擣衣
孤客	晚歸
寒江	蘆雁
雪滿	群山

故帝室技藝委員橋本雅邦翁は唯に明治美術史上の巨擘たるのみならず實に偉大なる世界の美術家なり其の揮灑する所一山一水一花一木道俗翎毛の微に至るまで悉くこれ美神の權化にして精氣奕々たり宜かり人其の斷墨零楮を得るも拱壁たゞならざるごと。若し夫れ天晴風和の日、徐に之を明窓下に卷舒する時は毎に暑の短きを嘆じて繼ぐに燭を以てせざる者無からん。

予等幸にして翁の神品を藏すること百を以て數へ日々愛護して措かず同好者と共に其の樂を偕にするに於て初めて清樂の眞訣を得んと。是に於て始て畫帖出版の志あり、傑作中の精華を撰んで先づ三十圖を得、之を棘梓に附すること、はあせり彫工摺帥とも名工を撰び假すに長日月を以てしたれば渠等兩工また之を莫大の榮となし刻苦精思快利の刀を揮ひ、圓熟の技を擅にし表裝匠の義俠的發奮と相俟つてこゝに漸く成るを告ぐ。一たび之を展開すれば山容水態樹林亭榭幼老禽獸花卉蟲魚の萬象神韻漂渺として雲煙坐間に湧き笑語蟲韻襟懷を清うするを覺ふ、予等喜びて曰く好哉々々、斯の如くにして初めて翁の眞髓を傳ふべしと。即ちここに由來を披瀝して同好諸君子の清玩を俟つ摺本素多からず冀くは速に貴需を賜ふて明窓淨机下の清玩進物贈呈品としては如何なる向にも適當し菓子果實等一時的の物品に比すれば實に永久的最良最好の經濟品、筆墨遊戯裡の好粉本とせられ故大家の眞髓を賞玩せられんとを。

各新聞批評

報知新聞

▲雅邦帖 故橋本雅邦翁の墨蹟は尺幅千金に値し、一葉の蘆の畫も尙百金を超ゆるを以て翁の畫風を

慕ふの人もこれを得るに難んずる所なるがこの雅邦帖出で、初めて世の渴望を満たすに足るべし本帖蒐むる所三十圖、その筆致畫様の多趣ある流石に巨匠の非凡なる技倆を窺ふべく「喬松雙鶴」の高韻「春晴岳雪」の枯淡「狙公操縱」の輕妙「池上鴛鴦」の濃艶、帖を披いて先づ其三四圖を見るも尙斯の如く各種の異彩を放てり翁の筆に上ればいかなる畫材も活きざるなく時には光琳の墨を廢せんとする「氣温花香」の如きあり「田家秋成」の圖は廣重の筆致を奪ひて然も俗に流れず最も翁の眞手腕を發揮したるは「山高塔小」「海氣滿樓」「風伯鳴枝」「寒江蘆雁」「雪滿群山」の數圖あるべしこの帖に依りて翁の筆の縦横にして物として佳ならざるなき大畫才を窺ふを得べく滿卷の光彩その印刷なるを忘れて恍惚たらしむるものあり表裝は緞子表子の折本にて畫幅の稍小なるは憾みなれど彫刻印刷の精巧殆ど原畫の眞を摸し着彩も頗る巧を極めたり美術愛好家の書架一冊を備へざる可からざる珍畫なり(正價三圓八十錢發行所本郷彌生町二光華堂發賣所神田東京堂)

萬朝報

▲雅邦帖 明治の畫傑と稱せられし故橋本雅邦翁の揮毫にかゝる「喬松雙鶴」以下三十圖の逸品を縮寫して精巧ある木版着色摺りとし裝釘優美なる一卷の畫帖としたるもの、山水あり、人物あり、花卉あり、禽獸あり、俗流を脱して清韻奇趣に富める名匠の妙技は、之によつて其一斑を窺ふことを得

國民新聞 東京たより (徳富蘇峰先生記) 金曜午後四時 門外漢

●行先、行先のみを辿る新聞記者にも、時には過去の記念が、王し來るとあり。何時の頃にやありけむ雅邦翁の作品展覽會の、上野公園梅川樓に開かるゝや。參觀に出懸けたる記者は端なく其の入口

に於て、川上大将の母衣馬車を驅りて來るに會し。相掛し相伴ふて之に赴き。遂に別室に於て、雅邦翁岡倉覺三諸君と午餐を喫しつゝ、風雅の談話に、四半日の閑を消したるにありき。而して今や大将の墓柩は、雨敲風打其古色を染め而して雅邦翁の墳艸復た芽やたらんとす。死生契濶、眞に浩嘆に堪へざる也

○頃る「雅邦帖」を寄せ來る。其の畫幅三十個、其の書面は、葉書大に過ぎず。是れ蓋し當初より一帖として揮洒したるものにして、變化の中に統一あり。規模小なりと雖も翁の典型を見るに有餘焉。○翁や向ふ所、必らず其の特色を發揮せざるをなし。されど其の得意は、實に風景にあり。吾人は人物よりも、動物よりも其の山水畫を取る也。而して山水畫の神品に至りては直ちに雪村の墨を厭す。探幽以下は、殆んど數ふるに足らず。

○意匠に至りては、必ずしも斬新ならず、又た多々益辨するが如く豊富ならず。然も其の畫幅に對すれば其の畫題の舊套を襲ふに似ず、清新の氣人に迫るは何ぞや。蓋彼は決して死畫を畫かざれば也。○若し露骨に云へば、翁の風景畫題の十中七八迄は、故人瀟湘八景の畫題を燒直したるに過ぎざるの感なきにあらず。されど翁は明人の唐詩を摸するが如く、其の聲貌を摸するにあらずして。實に其の神氣の融會を見る也。翁は此點に於て、故人不傳の妙を得たり。翁は足利時代の相續者と云ふ可し、摸倣者と云ふ可らず。

○翁や好んで殘山剩水を畫く。偉大なる山水を、正面より正寫するが如きは、翁に於て甚だ僅有の事たり。然も其の殘山剩水や、實に人をして、天地と冥合せしむるの看なきにあらず。時に其の畫品寫實に傾くものあるも、北齋、廣重の徒をして、其の日本の風景の眞趣を斯く迄も能く描き出だし。更に雅韵神味の優厚なるに愧服せしむるものあるを見る也。

○翁は大家也。其の風景畫を以て、擅場とをすも、決して一本調子にあらず、其の野菊の籬頭に、蜻蜒の點ずるが如き。稻穂の上に、蝗の止りたるが如き。輕々淡々の裡に、殆んど言明し易からざる妙機を寓す。記者は此の畫帖に對して、轉た今昔の感に勝へず、豈夫批評と謂ん哉。

東京朝日新聞

○雅邦帖粗雜の出版もの、多き今日此帖の發行は砂中に金を得たる心地す著者は故橋本雄邦翁にして四季三十圖悉く是れ精神奕々淡彩濃墨其の妙を極めざる無く裝釘の新意匠と相俟ちて机上の清玩と爲すに足る(正價三圓八十錢東京神田東京堂發賣)

讀賣新聞

○雅邦帖橋本雅邦翁の筆に成れる喬松雙鶴以下三十題の畫を集め木版彩色刷として立流なる緞子表裝の畫帖に仕立てたるものなり山水あり花鳥あり人物あり動物あり有らゆる畫材は殆んど網羅して漏す所なく殊に翁の筆致如何に就ては今更ら品評を要せざるものあり唯だ彫刻未だ精巧なりと賞するを得ず隨て翁の得意とする淡墨模糊の所など往々遺憾とするの點なきを得ずと雖左りとして流石は大家の筆なり見て以て樂むべく就て以て學ぶべきもの少なからず。(價三圓八十錢本郷區彌生町二光華堂)

日本及日本人

折本畫帖を裝ふに緞子表金線を以てし、精巧なる木版に極彩色の四季三十圖、曰く、(中略)精采の奕々たる、神韻の漂渺たる、一たび此帖に對すれば身の塵寰に在るを忘れ、栩栩然として美神と共

327
56

に遊ぶの思ひあらしむ。雅邦翁が明治の巨匠にして其の断紙零墨と雖も世の之を視ること猶ほ龍牙
麟角の如くなるは、復た贅するを須かず、而して今ま此帖出づ、世の玩賞家は當に拱璧を獲たるが
如く、其の狂喜知るべきなり。(特價參圓八十錢東京市本郷區彌生町二、光華堂)

六

發行所

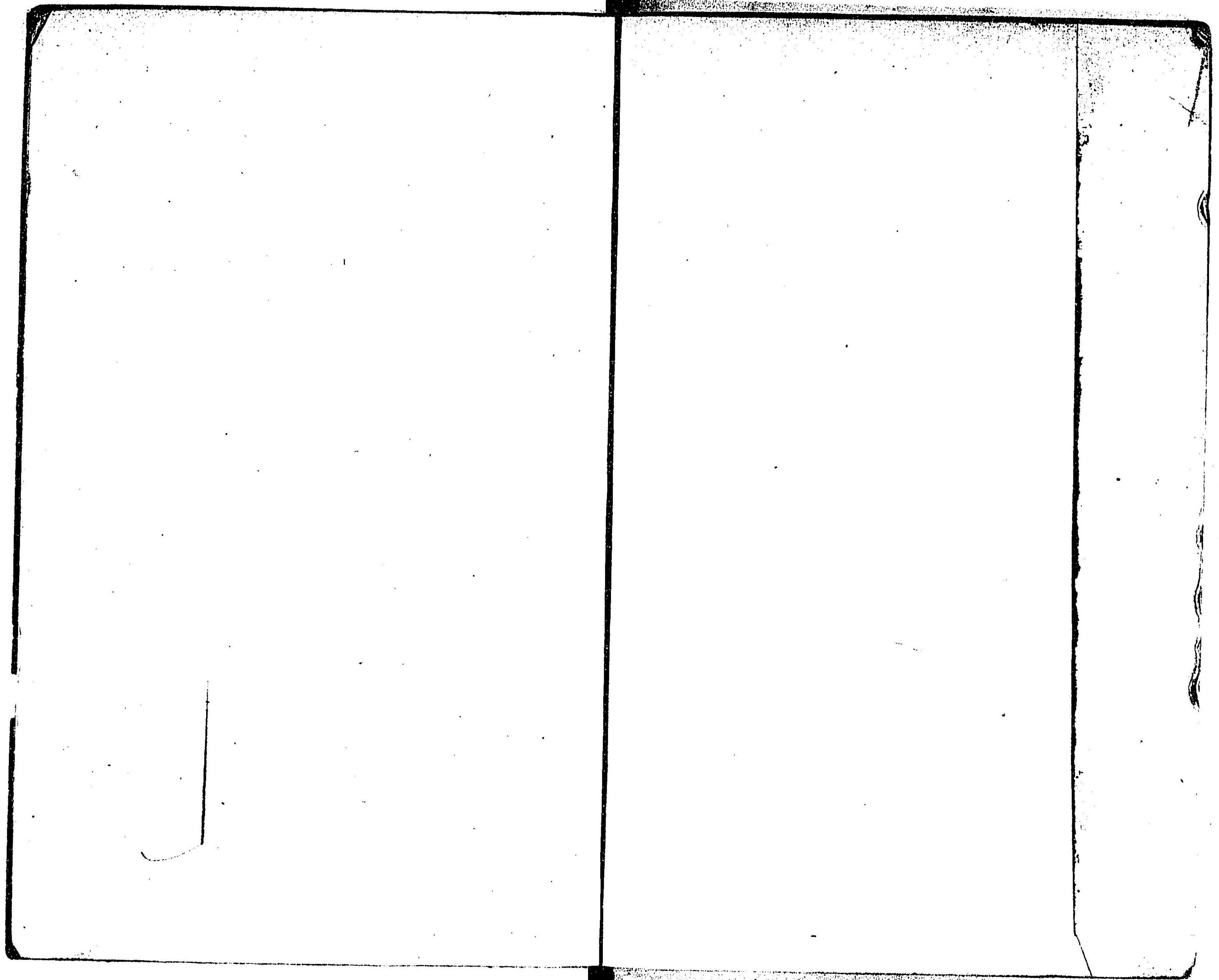
東京市本郷區彌生町二番地

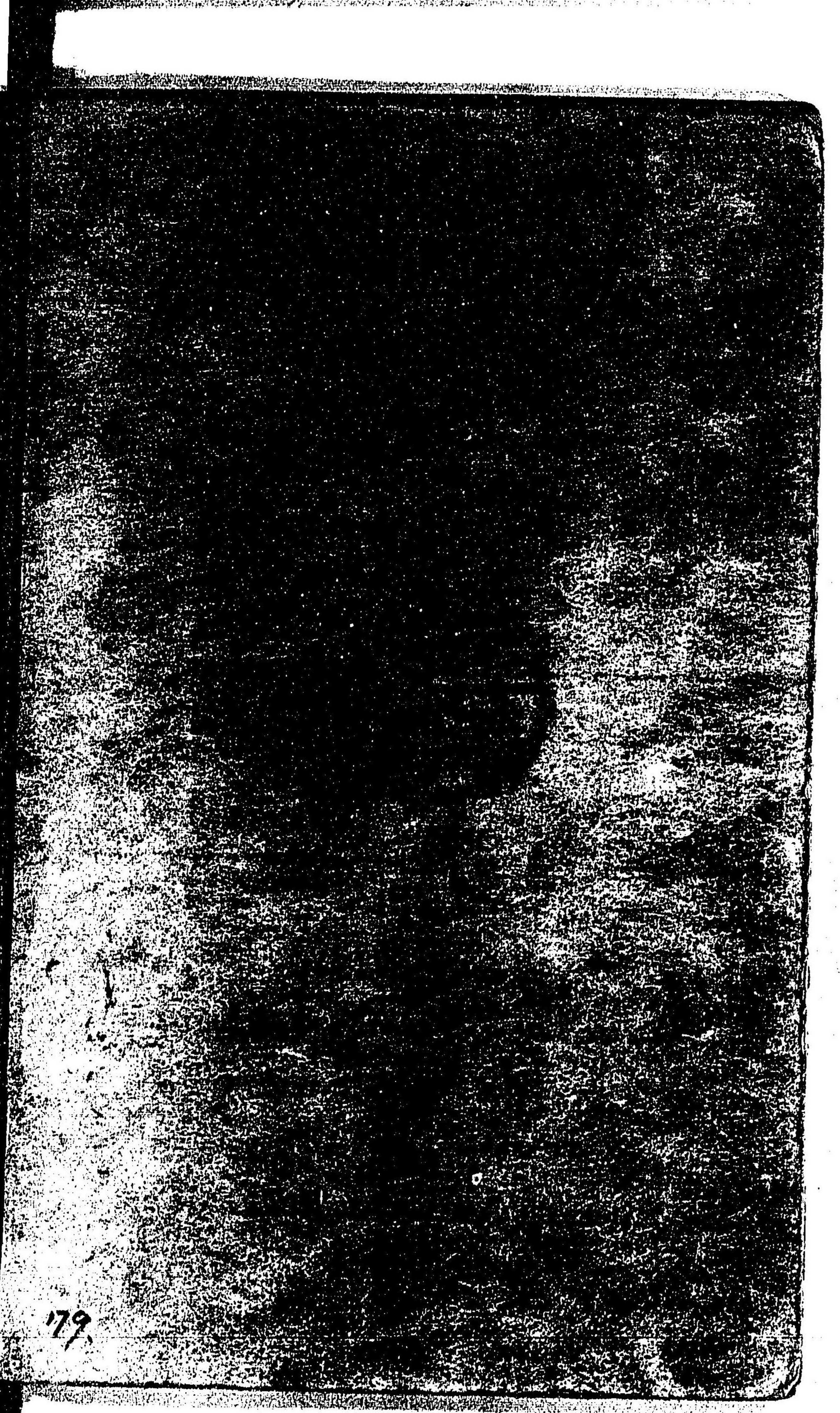
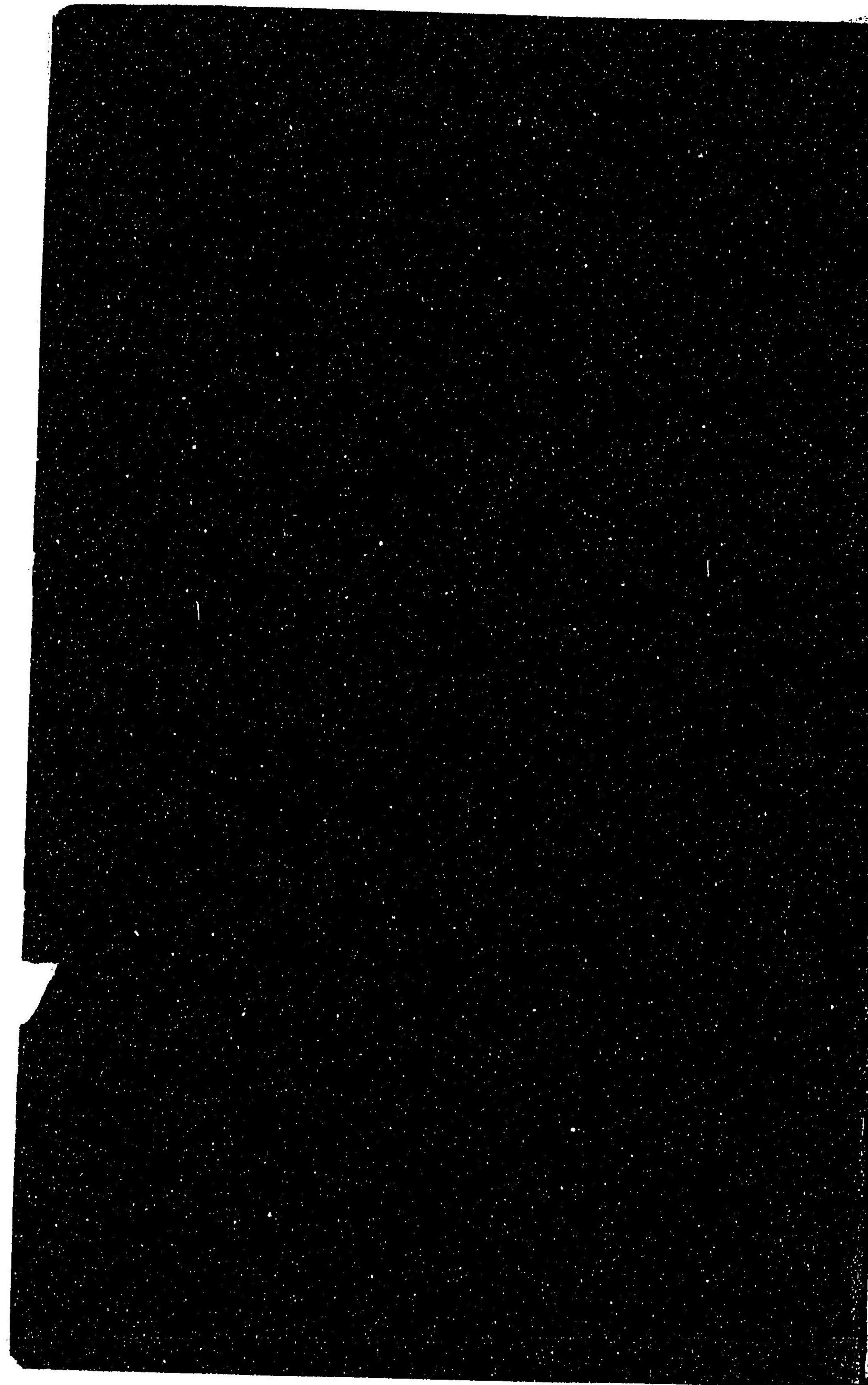
光華堂

大賣捌

東京市神田區表神保町

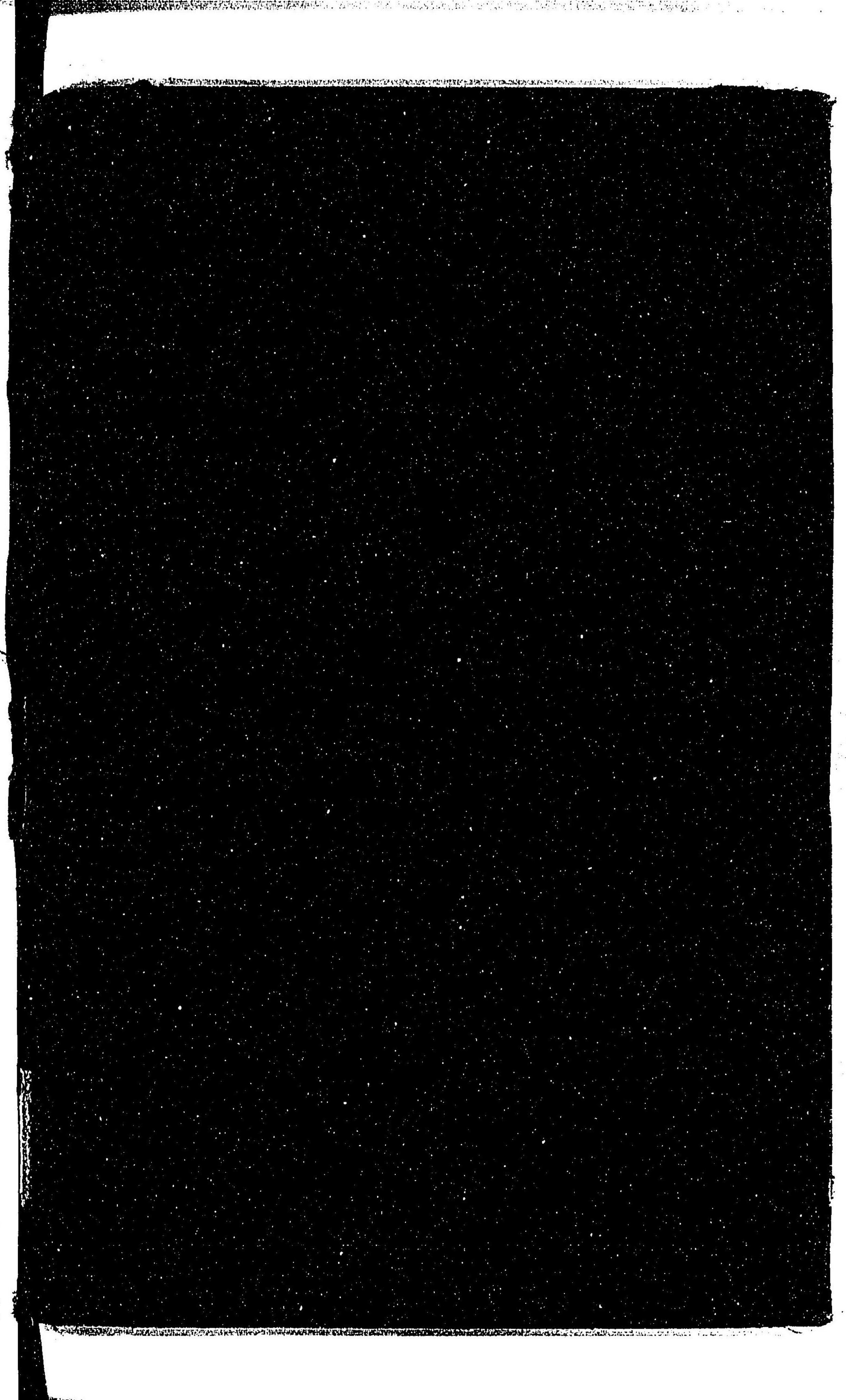
東京堂





179

1827
95



070364-000-3

327-56

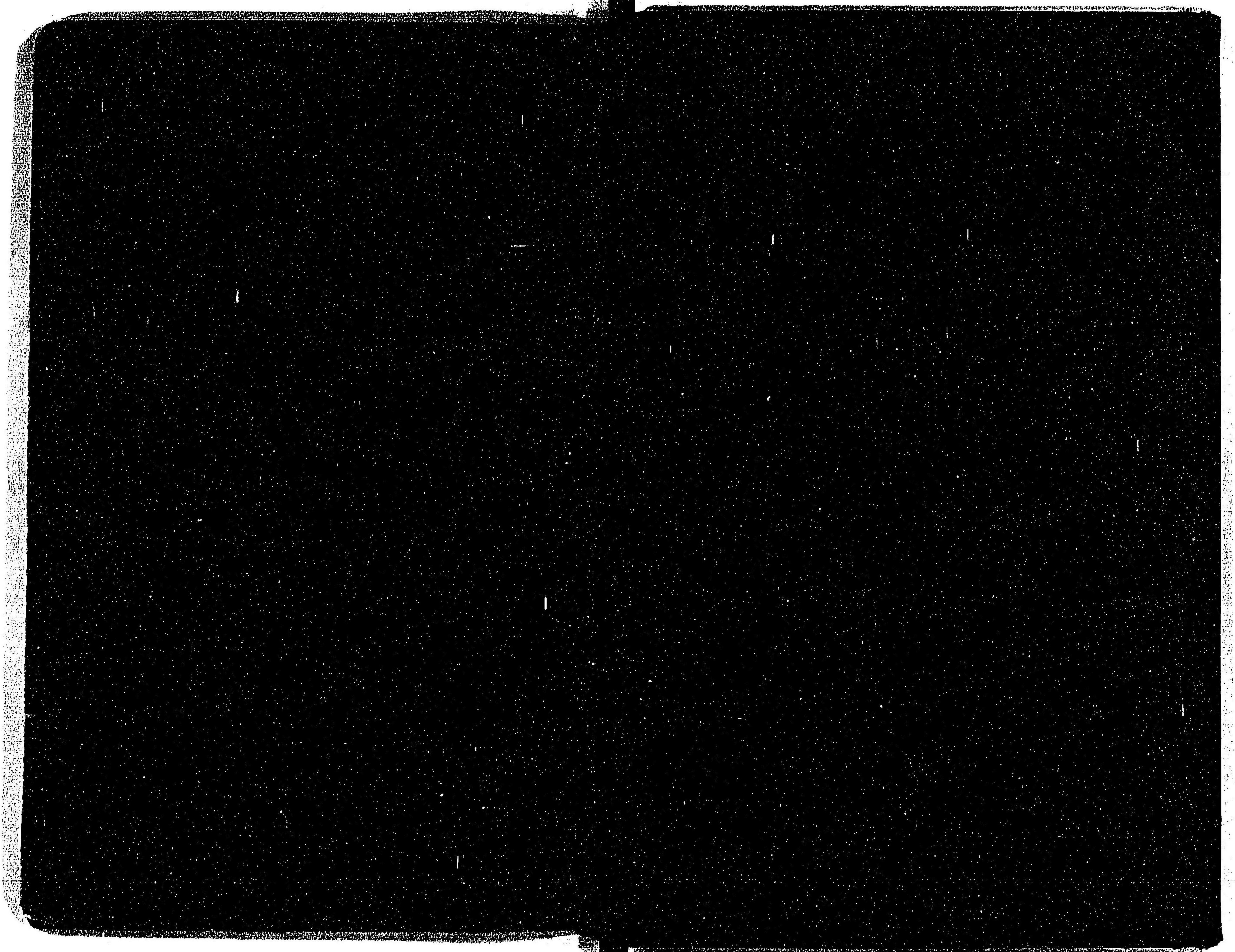
俳画法

中村 不折/著·画

M42

CEC-1542





327
56

